

平成27年（西暦2015年）5月

瞑想録（その6）

滝沢 無縛（たきざわ むばく）

本論は私の日々の瞑想の結果をまとめたものです。その瞑想の主題は、東洋思想に基づく「連続体と蓋然論理」です。究極的には科学と対をなすと思っているものですが、科学周辺に位置するものの、科学そのものではありません。学問でもありません、再現性も絶対真も保証しないことを「売り」としているからです。また、瞑想であるという特性上、根拠をこれ以上提示できない言明も含まれています。特に主題以外の部分には、現行の常識では「誤り」とされていることやタブーとされていることも含まれていますが、あくまでも主題を見て下さい。その上で言明を信じるか信じないか、それは読者一人一人に委ねられています。なお、「真理は深いほど簡潔であるべきだ」と言う立場からは、この論集における何十頁ものだらだら書きは、残念ながら私がまだ真理の核心に到達していないことを、如実に表しています。なお、この論集の基礎となる先立つ瞑想録については、下記のサイトを参照してください。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

2015. 3. 22

1、忠臣蔵考（その1）

忠臣蔵、仇討物ではありますが、随所に日本人の人生観の反映があつて、日本人の「特殊性」を解明するための極めて優れた素材であると言えます。この多面的な事件は、およそ一言では言い表せないものですが、本日以降の記事ではそのいくつかの要因を見てみることにします。

本日のメインテーマは辞世の歌、まさしく死の直前の遺言、ダイイングメッセージです。過去の偉人たちを見ますと、「これが今直ぐ死ぬ定めの人（ひと）の気持ちか」と疑いたくなるほど落ち着き払った、素晴らしい辞世の歌が多いことに驚きます。いくつか紹介します（注：ワードのエラーを避けるために古語は多少改変してあります）。

①願わくは花の許にて春死なむ あの如月（きさらぎ）の望月（もちづき）のころ（西行）
一春の気持ちの良い時に、仏さまの命日に合わせて、満開の桜の下で逝きたいものだ。もののあわれを確立した西行法師の極めつきの美意識が、余すところなく表現されています。そしてこの歌通りに逝きました。彼の美学はきらびやかな死を以て完

瞑想録（その6）

成した訳で、この辺は武士道の「生きることは死ぬことだ」、あるいは三島由紀夫の自死による美の完成にも影響を与えています。

②浮世ヲバ今こそ渡し武士(もののふ)の 名を高松の苔に残して(清水宗治)

ー清水宗治は戦国時代の備中(今の岡山県)高松城主で、毛利方の前線に居り、羽柴秀吉と対峙していました。両軍の和議により、宗治の切腹で城兵は安堵され、他方の秀吉は主君の織田信長の仇討のために大返しをする訳ですが、その宗治の辞世の歌です。彼の定めに従った潔さと、武士の名を、つまり名誉を重んじる性格が美しく出ています。

③散りヌベキ時知りテこそ世の中の 花は花なれ人も人なれ(細川お玉)

ー細川お玉は洗礼名ガラシャ、謀反人明智光秀の娘で細川家に嫁いでいましたが、父の累が細川家に及ぶのを恐れて、自ら命を絶しました。散って真の人となった訳です。女性ながら武人の娘たる潔さが際立っています。

④アナ嬉シ心は晴れる身は捨てる 浮世の月にかかる雲なし(大石内蔵助)

ー討ち入り成功後お仕置き前の内蔵助(くらのすけ)辞世の歌です。喧嘩両成敗のご政道を通し、主君の無念を晴らし、かつ打ち首でなく名誉の切腹と決まった今となつては、死ぬことすらも喜びだと言う意味です。晴れやかな気持ちが伝わってきます。

こうして、世の歴史に残る人々の、死の直前の辞世の歌を見てきました。そこには「死の恐怖」とか「命乞い」と言った末節を汚すような要素はみじんもなく、また恨み節もなく、極めて清々しく晴れやかです。我々後の世のこれらの歌を読む人々の、心を清めてくれます。これらの人々の生前からの凜とした態度が、死の一点に濃く凝縮しています。これが日本人特有の、浮世に恋々としないうれさで、もののあわれそのものでもあります。

さて、こうして見てきてふと不思議になるのですが、忠臣蔵のもう一人の立役者である吉良上野介義央(よしなか)の辞世の歌が、どこにも見当たりません。吉良も立派な武士、しかも高家筆頭と言う家格の高い武士であり、もちろん教養もあったはずですが、彼の辞世がなぜか伝わっていない。内蔵助の清い武士道からして、辞世を読む機会とは与えたでしょうし、もし吉良が詠んでいたなら素直に世に伝えたはずだと思います。ところが伝わっていないということは、吉良は武士にもかかわらず死が怖くて、とても辞世を詠む心の余裕がなかったと結論付けざるを得ません。

「吉良さんは領民思いの良い殿様だった」、これはどうも史実のようです。彼の地元の吉良町を始めとする東愛知の人々の多くは、この国民的出来事である忠臣蔵にもかかわらず、吉良さんを今でも慕っています。「四十七士なんてストーカーみたいなものだ」、こう公言する人までいます。「判官鼻眞(ほうがんびいき)」の日本でも、地元鎌倉では老獺な政治家の源頼朝の方が慕われているのと同じ、殺生関白と言われた豊臣秀次も地元の近江八幡では名君と言われているのと同じ心情です。そして吉良さんはあるいは良い殿さまではあったのですが、どうも末期は潔くなかったようです。そして末期が潔くないと、あたかもその人の人生全てが潔くなかったように見えてしまいます。日本人の潔さ、美学とはそういうものなのです。三島由紀夫も醜い老後を曝したくなかったのでしょう。

そして私の知る限り、吉良さんの辞世の歌の有無について議論した文章を今までに見たことがありません。人は一般に、今まで空き地だった所に家が建つと気付くのですが、逆に今まで家が合った所が空き地になっても、以前何が建っていたのか大抵思い出せません。ここに気付きの非対称があり、無いことに気付く方がよっぽど難しい訳です。と同時に「無いことに気付く」ことはしばしば、事物の解明の大きな手掛かりになります。そして「無いことの気付き」には深い知恵が要ります。

歴史にもしもはないのですが、このように仮説の光を当ててみると、ファンタジー効果によって見えなかったものが見えてきます。忠臣蔵には他にも次のような素朴な疑問がありえます。

- ①もし仇討が1年半もの穏忍自重を経ないで直ちに実行されたら、この事件は人の心を惹きつけたらどうか？
- ②もし仇討に失敗して全員犬死したら、人々の評価や幕府の裁定はどうだっただろうか？
- ③自ら主君を選んだ訳ではないのに、どうしてここまで命をかけられたのだろうか？
- ④もし自分ならこんな境遇にはなりたくないのに、なぜこの話に涙してしまうのか？
- ⑤この奉公関係が、現代の会社の上司と部下とかがあったらどうなるだろうか？
- ⑥大東亜戦争時の特攻隊の精神との類似点は何か？
- ⑦日本人の忠臣蔵好きを、外国人は日本人が野蛮な証拠とする風潮があるが、どう反論したら理解してもらえるか？
- ⑧もし義士たちが切腹にならずに行きのびたら、彼らの評価はどうなったか？
- ⑨もし義士のうち半分位が討ち死にしていたら、この事件はどういう評価になったか？
- ⑩もし惜しくも吉良を取り逃したら、その後の事件の顛末と評価はどうなったか？

等、色々な切り口がありえて、それらの問いをテーマに瞑想すると、今まで見えてこなかった「日本人の心」「日本人の美意識」が良く見えてきます。これらのいくつかは、三島由紀夫の美学にも影響を与えたことでしょう。

これらの諸課題については追々瞑想していくこととして、本日はとりあえず問題提起としておきます。

最後に吉良さんになったつもりで、辞世を創作しました：

縁(えにし)より 刃(やいば)結ぶや 武士(もののふ)の 血しぶき染まれ この庭の
雪
お粗末でした。

2、ウィキペディアから学ぶこと

以前に「ストリートビューから学ぶこと」と言う記事を書いた。そこでの要点は、「ストリートビューは愚直にバカチョンで、ローテクで智恵がないから役に立つ」と言う内容だった。たしかにストリートビューは撮影するだけ、愚直にアナログである。ではやはり人々に辞書代わりに多用されている、双璧の「ウィキペディア」から学ぶことは何であろうか。ストリートビューとは一見対照的に理屈と字だけだが、何か学ぶことはあるのだろうか。

ストリートビューが膨大な画像集であるのに対して、ウィキペディアは電子版の辞典あるいは百科全書である。百科全書の特徴は、古今東西の重要事項の、学問的にほぼ決着した、つまり死んでお墓入りした事実を、基本的に文字と論理によって、簡潔な説明を主観なしで淡々と記していることである。ここでも、記述内容が愚直に正しいと言う保証があるからこそ、我々は安心して使える。

ここでまた「愚直」と言う形容詞が出てきた。「愚直＝安心」と言う訳だ。ただしウィキペディアの愚直は決してバカチョンでない。それどころかこれらを編集し書きあげて構成するのに、あらゆる分野の専門家の、膨大な専門的知識を総動員して行う。この意味でウィキペディアの愚直は、バカチョンと正反対の最高権威の愚直である。

私たちは学校で、辞書や事典を「使い潰せ」とは指導されるが、「智恵の塊だから上座に置け」とは指導されない。大学教養課程での化学実験でも、たたき上げの実験指導員から、「辞書なんて必要な時に参照すれば良くて、あとは扉の重りにでもして置け」と言われて、「なんて謙虚の無い、思い上がったたたき上げだ」と懔然とした記憶があ

る。新入社員の時も現場の職長に、「センサーなんて用があるときだけ呼べば良いのだよ」などと指導されて、これも素直に従う気になれなかった。

ところでタクシーとかの運転手、運転は上手いのだけれども漢字一つ書けない人は大勢いる。ところが彼らが運転する車、この車一台を設計し製造し改良するのに、何千人もの博士や技術者が必要だ。そしてその博士たちも、現場の運ちゃんの使い勝手の声を反映して、つまり運ちゃんの下請けになって技術開発を進める。これはまた一種の、「上下の矛盾」にも見える。こうなってくると私は一体、下請けの博士になりたいのか、あるいは意見は言うが一介の運ちゃんに居たいのか、自分でも分からなくなってくる。しかも博士のやることはデータ等による事実の確定、つまり仮説と言うファンタジーを殺して墓に入れることだ。

素朴に、私はウィキペディアや百科事典を「読む」ことが楽しい。大学教授に「君は辞書を読本にしているのか」と驚かれたこともある。楽しい理由は、辞書辞典には自分がそれまで知らなかった世界について、分かりやすく簡潔説明があるからだ。もちろん、それらの記事を読んで私が何か気付いたとしても、それは高々再発見であり従って学問的には無価値だが、学界の評価に関係なく、世界が広がることは喜びだ。私自身は「グローバル＆ファンタジー」を旗印にする者なので、何か狭い分野の決まりきった事実（死体）の守り役で人生を終わりにたくない、つまり百科事典を書く側になりたいと言う希望はないのだが、そして辞書書きに加担する愚直なセンサー方を尊敬しても居ないのだが、その成果は有りがたく利用させてもらっている。

思うにウィキペディアや百科事典は、顕微鏡や望遠鏡と同じく可視化のツールに過ぎない。ツールであるからにはレンズと同じで、精密な物ほど良い。だからセンサー方は言わばレンズ磨きの職人だ。と言うことは、私は運ちゃんだ。そのたたき上げの運ちゃんが、同じくたたき上げの実験指導員や職長に不謙遜の違和感を覚えたとは、一体どういうことだろう。

この問題についてつらつら内省したところ、次のような結論に達した。私はウィキペディアによって広げてもらった世界について、その基礎説明を踏み台にしつつ、瞑想の「グローバル＆ファンタジー」の世界を自由に飛翔していて、その瞑想結果はしばしば斬新で興奮するものであって、この「興奮のきっかけを呉れる」と言う意味でウィキペディアに感謝しているのだ。そして指導員や職長に違和感を覚えるのは、彼らの目的がファンタジーでは全くなくて、あたかもロボットのように手に職を付けるだけの低次元のものだからだ。

瞑想録（その6）

ウィキペディアを執筆するセンセー達を「愚直な墓掘り人」と呼ぶ権利は、同じくロボットの代用に過ぎない指導員や職長にはないのだ。瞑想は貴族のたしなみ、手に職は奴隷の仕事、そしてセンセー達は墓守人、こう言う構図である。つまりウィキペディアや百科事典は「アナログ対デジタル」と言うよりも、どちらも「愚直故に役立つ」と言うのが本質で、その伝達媒体がたまたま画像なのか言葉なのかと言う、ちょっとした違いがあるに過ぎない。

こう見て行くと世の中で大切なのは、デジタルかアナログかの二項対立と言うよりも、その与えられた素材で「どれだけのファンタジーが描けるか」なのだ。IT技術の発達で「愚直」がずいぶんと得やすくなった。だからこれらの素材を用いて壮大で新奇性の高いファンタジーを瞑想する、今はチャンスなのだ。そしてこのファンタジーを創造する能力、これは気付きと直観であり、まさに地頭の良し悪しである。例えば占いで、既成の座標軸に捕らわれずにどこに特徴があるかを乱雑から快刀乱麻で読み取れる、そう言う人類固有の気付きであり、知恵である。

1年以上も前に「なぜ働くのか」と言う記事で、「居酒屋が営めるのは保存、運送、捕獲と言った各方面での科学技術の進歩の恩恵である」と言うのは論理が逆で、「科学技術は居酒屋を通して庶民の役に立った段階で初めて開発の意義があった」と言うのが正しいと指摘した。そして同じ文脈で、「ストリートビューもウィキペディアも瞑想とファンタジーにネタを提供して初めて意義があった」と言えるのだ。表現の良し悪しはデジタル・アナログを問わずに、結果としての瞑想がどれだけ多産で躍動的かで決まる。

ではその知恵と気付きはどこから来てどういう形態なのか。これは人の防衛保存の本能から来るが、形態的には「心象」であろう。以前実態を「現状・言葉・数字」の3段階に分けたが、そして元々連続な物だから何段階にも分けられるのだが、今の問いには「現状・心象・言葉・論理・数字」の5段階に分けた方が分かりやすい。この内ストリートビューは現状であり、ウィキペディアは論理なのだが、知恵と気付きは心象の段階にある。これを解くカギは、人の心象空間に存在する様々な元の、そのタグ付けの微妙さと言うことになるだろう。タグはデジタルとアナログの双方の、言わば芽に当たる未発達でプリミティブな所のものであり、素朴にデジアナの良いところ取りをしている。

3、西行法師シミュレーション

西行法師、今から850年前の源平合戦のころを生きて、日本の和歌ともののあわれを確立した元祖風流人です。この人をモデルに様々な状況をファンタジックに設定し

て、この人だったらどう反応するかを瞑想検討することにより、日本人の本質や高等遊民の美学について探ってみます。もとより歴史にもしもはないので、以下の見解はあくまで私の私見です。蓋然推論のあり方をも見ようとしています。

本題に入る前に、彼の生涯のちょっとしたわき道に言及します。彼は奥州藤原氏を訪ねる旅の途中に、武蔵野でとある隠遁者に遭いました（宮下隆二著「西行物語」88p）。聞くと「若いころは都で内親王の護衛長をしていたが世をはかなんで出家し、経をもう何万回も唱えている」と言いました。西行は気が合って彼の庵で一晩語り明かしたと言うのです。

これ以上この隠遁者についての情報はありませんが、さぞかし高い悟りだったことでしょう。そしてもし西行法師がこの人に会わなかったら、この人の存在すら人類史から忘れ去られていました。と言うか、西行法師一人の後ろに、このように「知られざる隠遁者」が実は100人居ると思って良いのではないのでしょうか。私たちは彼らの悟りも聞きたいのですが、おいしいことに最早不可能です。こう思うと、西行法師の位置づけがますます重く感じられます。

それではシミュレーションに入ります。もし「ニセ西行」が現れたら、西行法師はどうしたでしょう。当時西行法師は、将軍の源頼朝に招待される程風雅の道では名が通っていました。だからこそそのニセ物、現代ならば名誉棄損で訴えるところでしょう。対応はそのニセ西行がどういうことをしたかにも依るでしょう。彼の名をかたって飲み食いした、あるいは下手な歌を自慢し流布した等が考えられます。私見ですが、西行法師はニセモノを放置したと思います。そう言う小さいことにはとらわれません。もうこの世の欲は捨てていますし、つまらないことに引っかかるのは返って修業の妨げになるからです。

ではもしそのニセ西行が、「本物は私であっちがニセ者だ」と言う程にずうずうしかったらどうでしょう。法師はやはりうっちゃっていたと推察します。より面倒で、場合によっては実害も考えられますが、それすらも仏の道の修業と悟ったと思われます。実際西行法師がある川で乗った渡し船が定員を越えた際、居合わせた野武士に「くそ坊主お前が降りろ」と命じられましたが（西行は元上級武士です）、「これも仏道の修業」と黙って降りています。

では、命より大事な歌を辞めろと命じられたらどうするでしょう。一時辞めてやり過ぎでしょうか。おそらくそういう姑息なことはしなかったと推察します。法師にとって歌こそ悟りでした。ですから歌を辞めろとは求道を辞めろと同義語であり、彼はたとえ死罪

瞑想録（その6）

になっても辞めなかったと思います。実際西行のことを「この軟弱者」とバカにしていた元同僚の文覚（もんがく）上人と会ったことがあるのですが、当初文覚は西行をなじるつもりだったところ、彼の静かな気合いに押されて手出しができなかったそうです。

特筆すべきは、彼の歌や言行録の全てを見ても、彼が出家前の世の中や同僚について愚痴ったという記録は一切見当たらないということです。朝廷に出仕してエリートコースを歩んでいれば、ねたみとか足の引っ張り合いとか讒言とか見栄の張り合いとか世間体とかは当然にあったことでしょう。法師が出家前でもこんなことを嫌ったのは当然としても、こんな愚痴も捨ててくるほど、愚かを嫌ったと言うよりも愚かから離れた訳ですから、もはやどんな形であれ引き戻されません。

「あなたの悟りで庶民のために是非世直しをしてください」、これはどうでしょう。大乘仏教の大悲願とは衆生を救いつつ自らも悟りに入ることです。理屈から言えば西行は世直しをすべきにも見えるかもしれませんが、ですが彼はおそらくやらなかった。その時代を少くく直したところで大した直しにはならないことを、法師は智恵と悟りで知っていたからです。つまり直すことが「世帰り」になってしまうからと言うよりも、自分の歌を通した悟りの道の完成こそが、長い目で見ればはるかに有意義な済度であると確信していたと思うのです。智恵者とはそういうものです。

ところで、「出家後の西行はどうやって日々の糧を得たのか」という素朴な疑問はしばしば聞こえてきます。ですがむしろ、「法師が出家の際に捨ててきた屋敷や財産はどうなったのか」の方が、庶民はより気になるのではないのでしょうか。あるいは親せきや近所の住人に取られてしまったのかもしれませんが、出家した後の法師にはそんなこともどうでも良かったでしょう。法師は老境に入ってから大仏建立の勧進の旅に出ます。そこで、「屋敷が残っていたら真っ先に寄付できるのに」などと考えるのは俗人です。法師は源頼朝に招待されて歌の道を話し、お礼に頼朝から銀の猫の置物をもらいましたが、門を出た所でその辺で遊んでいた子供に呉れてしまいました。勧進の旅の途中でのことです。つまり勧進とは資金もさることながら、むしろ心の勧進の旅なのです。

最後の問いです。もし神聖な庵（いおり）に土足でズカズカと入られたらどうしたでしょうか。おそらく無言で押し出して戸を閉めて鍵を掛けるのではないのでしょうか。またもし愚かな人に擦り寄られたらどうしたでしょう。やはり鍵をかけて二度と中に入れないのではないのでしょうか。愚かな者に関わってエネルギーと時間を吸い取られるとか垂れ流すことは、小さなことに見えて実は地獄行きにも等しい、天の運行を乱して天に唾吐き時を外す、この上ない愚行だからです。人の智恵は愚かを避けるために存在して

いると言って過言ではありません。世俗に引き戻されるのは修業放棄と同じです。悟りとは何でも許すことと全く異なります。

どうでしょうか。ちなみに本日の記事はあくまでも問題提起であって、問題解決ではありません。皆さまそれぞれに固有の解釈があることでしょう。それで良いかと思いません。

4、十二平均律

本日は音楽の話です。ちなみに私は、芸事は好きですが筋がありません。今日はその音楽の基礎となる音階の不思議について記述します。音階は元の長さの倍半分が1オクターブ（1音程差）になります。倍半分ということは基本的に対数の世界になる訳ですが、この音階と言うもの、なぜか東洋でも西洋でも共通に、「十二平均律 & 七音階」です。ここで十二平均律とは1オクターブを対数で12等分に分けた点を音とするという意味です。そして七音階とは、ドレミファソラシの7音で構成される、しかも「長長短長長長短」と言う並び方まで東西に共通しています。あたかも12や7が秘数であるかのようですが、これらを快く感じる理由は、おそらく本能まで遡るでしょう。

東西でここまで共通しているのは「出来過ぎ」とも思われますが、これには2説あるようです。1説は西域でできた音階が東西に広がったとする共通根伝播説、もう1説は独立に見出されたけれども人の感性の共通性によって同じところに落ち着いたとする説です。例えば和音の存在はこちらを支持します。なお、こう言う説の別れ方は古代神話にもよくあって、例えば世界中の神話に洪水伝説は広く見られて、少なくとも中近東については共通根でしょうが（旧約聖書のノアの箱舟とギルガメッシュの叙事詩等）、世界全体となると難しいです。

さてこの十二律ですが、厳密に十二平均律であるのが西洋の音階です。厳密に平均であるということは、移調してもメロディが全く変わらないということになります。そのお陰でギター等のコード進行が可能になりますし、和音であることも移調しても全く崩れません。これは一種の不変量です。そのお陰で西洋音階は電子演奏との親和性も強く、midi のような音楽言語プログラムや、更には「初音ミク」のようなボーカロイドも容易に作れる訳です。調子を変えるには単純な移調では変わらないので、単調を長調に移調するとか、あるいはメロディやリズムのモチーフを変えとかの手段を取らざるをえません。音色とか合唱とか言ったバリエーションもあります。また、洋楽の和音には「ドミソ」「ドファラ」「シレソ」の3和音がありますが、これらも実は移調すると同一の

瞑想録（その6）

構成である、つまり和音は1種類しかないことにも注意すべきです。総じて自由度は低いですが、これは不変量重視の裏返しでもあります。

これに対し東洋（雅楽）の音階は、厳密な平均等分から、ことさらに少しずれて出来ています。十二律を基本としながらも少しずれているので、移調をすると「同じ曲である」という意味でのモチーフは認識できるものの、その曲風は微妙に異なってきます。移調するだけで曲風が異なってくる、これはなかなか味わい深い要素です。日本の雅楽には具体的に、双調（そうじょう）、壹越調（いちこつちょう）、黄鐘調（おうしきちょう）、太食調（たいしきちょう）、平調（ひょうじょう）、盤渉調（ばんしきちょう）と言う6つの調子があります。これらには移調（平行移動）不変性はないですが、その代わりに「移調するだけで曲風が変わる」と言う面白味、深い味わいを有しています。そして調それぞれに固有の雰囲気があって、例えば「双調は明るい調子なので春の曲（例：春鶯囀：しゅんのうでん）によく用いられる」と言った特徴を有しています。同じ曲でも転調するだけで葬式のようになったりします。

なお、各国の民族音楽には、マイナーではありますが十二律から外れた物もあります。例えばアラビア音楽では4分の1音階が存在しますし、インドネシアには五平均律が、タイやアフリカには七平均律があります。更に前衛音楽や実験音楽の分野では、十二平均律ではあるが七音階を無視して全音平等に用いる試み、あるいは十二以外の分数でオクターブを区切る試みなどが盛んになされています。これらの実験の出来の評価は最終的に、人の感性がそれらに愛着を感じるか否かでしょう。

さて、以上見てきたような西洋の厳密平均律と東洋のずらし平均律、これは感性として、それぞれの国民性に大きく依存しているように思います。即ちかたや現代物理学に端的に見られるような統一性・不変性をひたすら志向する西洋音楽と西洋人、またかたやアニミズム的な多様性と微妙な心即ちもののあわれを志向する東洋音楽と東洋人と言う対比です。

加えて雅楽等東洋音楽の場合、いわゆる節回し、雅楽用語では塩梅（あんばい）とか蘆舌（ろぜつ）と言うような、いわく言い難くおよそマニュアル化できない、言葉になる以前のアナログな心象のレベルであって師匠から相伝するしかない、心の壁の直接表現みたいなものが、むしろ重要です。最近流行りのゲームに「太鼓の達人」と言うのがあって、ひたすら正確さを競ってコンピュータで点数化するのですが、あるいは「ピアノの達人」はありえても、「箏（ひちりき）の達人」はおよそありえないでしょう。仮にサブちゃんが演歌を歌っても、「演歌の達人」では落第点しかもらえません。

そしてそうであるとするならば、これら従来の物と全く違う音構成を追求する前衛音楽は、まだ顕在化してはいないものの、実は西洋とも東洋とも異なる斬新な「第3の文明」を創出しようと言う志の始まりや兆候であるとも見ることもできる訳です。これはデジアナの止揚による新文明の到来を予感させます。つまり前衛音楽家が思っている以上に、彼らの試みは新文化の創造と言う偉大な作業な訳です。さて、第3文明の内容たるや如何になることでしょうか。私は楽しみにしています。

5、相対論と双子のパラドックス

（注）本日の記事はマニアックなところがありますので、退屈な人は飛ばしてください。また、私はこの分野の専門家ではないので、不正確な記述もあると思います。また、ウィキペディア等のお世話になりました。

相対論には「双子のパラドックス」と言う逆理がある。相対論によると、光速に近い猛スピードで走ると時間が遅延する。したがって、地球上に双子のAとBが居て、Bのみロケットで宇宙に飛び立ちもどってくると、BはAより若くなっている。これが双子のパラドックスであり、ウラシマ効果とも呼ばれている。ちなみにこの場合は、Bのみがほぼ光速でダッシュしている。

さてここに、「間違いの双子のパラドックス」と言うものもある。これは次のように考える。相対論の趣旨に従えば、座標系は相互に相対的（式不変）なのだから上記のイベントはBから見れば、「Aが反対側に猛スピードでダッシュして戻って来た」と見えることになる。とするならばAの方がBより若いはずだ。「AはBより若くかつBはAより若い」、これはおよそ概念できないから、本当のパラドックスになる。

ところがこの問題に対する学界の見解は、「Bは加速系を伴うから、『間違いの双子のパラドックス』は単に過ちである」と、定まっている。たしかに「Bのみ加速系を伴う」のは事実だが、全てが相対的であると言う相対論の本旨に帰れば、「特定の質点が加速系を持つ」が本質的な違いであってはならないようにも見える。この観点から相対論を振り返ってみた。

先ず特殊相対性理論、これは①座標普遍性（慣性系の物理は互いに相対的で同じ式で記述される）と、②光速不変の原理（光速は座標系に依らず一定である）、の2本柱を基礎に建設されている。ちなみにこの2原理は独立である（従って両方とも必要）。更にちなみに、電磁場の方程式は既にこれらの要件を満たしている。そしてこの2原理から導出されるのが「ミンコフスキーの4次元世界」であって、ここでは時間（我々の

宇宙では1次元)と位置(同3次元)が独立でなく、互いに相互作用して歪み合う。時間や位置でなく、光速という速度(m/s)が実は第一義的な物理量である。

特殊相対論では加速系という言葉すら出てこない。そこで一般相対性理論に進む。特殊相対性原理を一般相対性原理に拡張するにあたって、拡張したところと考え方を見る。光速不変の原理はどんな物も力の伝播も、光速を越えることはできない(質量や時間が虚数になってしまう)ことを意味する。速度に限界があるならこれは加速度にも何らかの改変を要請することになる。また、時間や位置の他に重要な物理量は力であり、これも普遍原理によって統一されるべきである。更に一般力学の観点からは加速度(速度の微分)まで検討すれば十分であると読める。更に $F=ma$ (力は質量と加速度の積)からは力と加速度には深い関係がある。

思うに以上の省察に基づいて、相対性原理は一般化された。実際一般相対性理論は、①慣性系だけでなく加速系についても座標普遍性が成り立つべきである(共変原理)と、②慣性力と重力の違いすらも相対的とすべきである(等価原理)、の2本柱で建設されている。ちなみに、特殊相対性原理と一般相対性原理を単純比較すると、「光速不変の原理が等価原理に置き換えられている」ことになるが、この「置き換え」は自明ではない。実際に等価原理は光速不変の原理を包含していない。つまり一般相対論に行って光速不変の原理が消滅した訳ではなく、等価原理が新たに加わったのである。等価原理は大胆な提案であり仮説であるが、これまでにブラックホールとか重力レンズ等を予測し、実際に観測されていて、これを否定する事実は見つかっていない。

そして等価原理が正しいのなら加速系が特別な意味を持ってきて、「どちらが現実エネルギーを使って加速しているか」が重要性を持つのである。相対性理論は全てを相対化するのが理念であるところ、加速系と言う概念が(相対原理に反して)絶対的な意味を持つ論理帰結となって、「AもBも同時に若年寄」と言う思考実験は、過ちと結論される。

なお物理学には、マッハの原理とかシュレディンガーの猫の逆理とか、未解決の基本問題が結構多い。「基本的概念ほど未解決」な状況の中で一般相対性原理の座標普遍性は上手く理解されている。これは「世の中が全部まとめて縮んでも、物も縮むが定規も縮むので、まるで変わらないはずだ」と言う原理で、読んで字のごとく極めて基本的な原理だが、なぜか理解が存在している。これの基本は共変原理に基づくゲージ原理であって、最も単純には「接続の幾何」(リーマン幾何)で記述される。ゲージと

は物差しであり、ゲージ原理の最も素直の定式化が接続の幾何なのだが、これでうまく行ってしまうとは調子が良すぎないか。

実際、アインシュタインが運良く進めたのはここまでであって、彼としては当時重力以外に唯一知られていた電磁力を、時空4次元に続く第5次元目に組み込もうと企図したのだが、形式的にはともかく実験と整合しなかった。アインシュタインはもちろん天才だが、彼が運良く進めたのも一般相対論までだったのだ。今物理学の全体を振り返ってみると、むしろマッハとかシュレディンガーの方が未解決なことの方が「自然」に感じられてしまう。

シュレディンガーの猫の逆理に見られる「微小系と大局系の関係」は、相対論では「加速系の絶対的地位」に重なって見える。つまり相対論を鏡にすれば、「微小系と大局系はどちらも等しく相対的」と言うのはあり得なくて、そこに何か「相対の中の絶対」があるように見えるのだ。物理に限らず今は「何でも相対」の時代である。これは個人の自由を極限まで保証する代わりに、「オーム真理教もイスラム国も等しく存在する権利がある」と言うアノーマリーを生起させている。そろそろ「相対の中の絶対」を考えても良い時なのではないか。

6、雨月物語

雨月物語（うげつものがたり）は今から約300年前、享保期の江戸時代の、高等遊民的作家であった上田秋成の代表作である。一言で言えば怪異物で、江戸爛熟文学に属する以上は「トンデモ話」なのであり、それなりに楽しめるのであるが、全編を通して彼が言いたかったこと、描きたかった世界がなんであるかは、直ちには判然としない。もちろん教訓が判然する程明白であるならそれは文学とか芸術とは言えないのだが、それにしても論理も情理も直ちには見えてこないのだ。

そのせいもあってか、この作品は高校までの教育ではせいぜい作品名を暗記させられる程度である。だが、この物語に収録の個々の作品の鑑賞の後に全般を俯瞰すると、そこに何やら、言葉にはできないがおぼろげに見えてくる物がある。まず、彼の作品に出てくる妖異やその犠牲者は、落ち度がないか少なくとも作品上は見えていない。その意味でこの作品の主張は一言で「不条理」であると言えるのだが、ただ不条理と言ったところでこの作品をほとんど解説していないことになる。その証拠に、不条理ではあるもののこの作品からは日本人定番の「もののあわれ」はほとんど感じ取られない。かわいそうだが涙は出ないのだ。しみじみともしない。

この作品は9個の短編より構成されるが、そのうちの3編を少し詳しく見ることにする。まず「白峰」(しらみね)。保元の乱に連座して讃岐の田舎に流された崇徳(すとく)上皇を、かつての部下だった西行が慰めに伺候する(これ自体は真実である)。そもそも崇徳院は鳥羽天皇の長子であったが、鳥羽院は崇徳院を、実は彼の父である白河院の子であると信じていた。そして、もちろん崇徳院に罪はないものの、冷遇され続けて結局流罪になった。物語では崇徳院は恨みの霊となって、訪れた西行にうらみつらみを、論を持ってぶつける。それに対し西行は仏の教えを持って諭し、論に破れた崇徳院の霊は、怒りながらもやがて成仏して消え去っていくと言う話である。ここには破壊的な怒りはあってももののあわれはない。また仏の慈悲の広大無辺を垂らす教訓説話でもない。ただ静けさが山にこだまするのみだった。

次に「吉備津の釜」(きびつのかま)。ある庄屋の道楽息子を、早く身を固めさせようとした親が、家格の釣り合いのみを理由に、吉備津神社の神官の娘と結婚させる。神官はその際に結婚の吉凶を占ったところ凶と出たが、深く考えなかった。嫁に行った娘は、旦那はもとより義父母にも良く尽くしたが、道楽息子は女を作り、嫁の持参金を持ち去って駆け落ちしてしまう。ここでその道楽息子が贅沢三昧で暮らしたと言う展開なら井原西鶴物になるのだが、こちらの物語ではついに怒り狂った「何の落ち度もない出来た嫁」が、怒りのあまり妖異になって旦那を襲い、ついにはだまし討ちをして呪い殺してしまう。道楽息子は罰で良いとしても、その妖異になった出来た嫁をどう考えたらよいのだろう。この話も不条理の限りではあるが、もののあわれとは異なる。

3つ目は「蛇性の淫」(じゃせいのいん)。あるボンボン息子が旅先で、「袖振り合うも他生の縁」で女性と知り合い契りを交わす。ところがそれを見た覚者が、「この女は魔性だ」と言う。だが素直な女性であり息子は信じない。そして幸せな日々が続くが、ある日「娘道成寺」でおなじみの道成寺の高僧がやって来て法力により、その女が蛇であることを見抜いて、壺に封印して話は終わる。なぜその性格の良い女が怪異になったのか、その高僧も「前世の因縁であろう」としか語らない。また高僧も当時すでに高齢であり、これが最後のお勤めであったようだ。この話に至ってはむしろ、妖異になった女性の方に関心が移ってしまうほどだ。

これら一連の話を読んで来て感じたことは、第一に秋成は既成の安易な道徳に賛同していないということである。既成の道徳はもちろん、世の人々の安寧のためにあるので、必要なものではある。しかし形式的な儒教のように「何でも年上」「何でも御恩と奉公」と言うように硬直してしまうと、為政者としてはあるいは便利かもしれないが、本来守るべき人々の心を返って圧殺してしまうし、それにその片棒を担ぐなど高等遊民としては名折れですらある。

第二に感じたことは、秋成は娯楽に徹しているということである。端的に言えば四谷怪談と同じで、読者が「ああ怖かった」と思って一時を楽しんで寝てしまえば、例え次の日には覚えていなかろうと、知ったことではないのだ。つまり後世に名とか何かを残そうなどと言う気はさらさらない。物語は今に伝わっているが、それはあくまでも結果論なのである。

最後に物語全編を読んでみて感じたのだが、秋成はどうもこの世の側に居ない。彼はむしろ怪異、何かの理由で世を恨む怪異となった方に自らを置き、かつ感情移入しているのだ。だからこれらの一連の物語の主人公は、西行でも道楽息子でもボンボン息子でもなく、崇徳院であり裏切られた素直な嫁であり、なぜか蛇に移った不幸な女性なのである。そして「恨むのはあさましいとはいえ、一寸の虫にも五分の魂、人なんてみんな訳ありさ」と主張しているかのようだ。

しかもその「裏返し」を、世相風刺と言うよりは一つのファンタジー（嘘）として、面白がってやっている。人を食ったという点では立派に江戸文学だ。爛熟している。これら爛熟した江戸文学、例えば南総里見八犬伝もそうだが、余り外国語に訳されていない。教訓の無い物語は外国人には無駄話としか映らないのだろう。だが無駄こそが潤いである。効率主義の愚かや無用の用を、今の欧米式キリスト教式グローバルスタンダード一辺倒に対する一服の清涼剤として、教えてやりたいものだ。「一人は万人のために」なんてクソ食らえ。

7、苦役列車

苦役列車（くえきれっしゃ）は、中卒の星であり性犯罪人の息子の、西村賢太さんの出世作で、2010年の芥川賞に輝いた作品である。今日はこの作品を取り上げる。最初に断わっておきたいが、私は芸術、特に文学にはからきし音痴である。義務教育時代も、芥川龍之介も太宰治も夏目漱石も1作として読み通したことはないし、推理小説は後ろの結論から読むことにしている。芥川賞作家と言っても西村さんの他に知っているのは、綿矢リサと平野啓一郎だけだ。まあこの2人の作品はなんとか読み通せたが。

私は西村の受賞の時より、彼の経歴に大いに興味を持った。負い目とプライド、日雇いの港湾労働者、3畳一間を転々とし、残金はいつも200円程度。これは考えようによっては天国のような状況だ。もう失う何物もないから天下御免、何でもありで、肩で風を切って街を歩ける。ある意味究極の遊民生活である。ちなみに私もかつては貧

乏学生だったから、彼ほどではないが似た生活はしたことがある。その感想は「二度と御免だ」だ。ああいう生活が嫌だと言う原動力だけで、同じほど大嫌いな会社生活に甘んじていたとも言えるほどだ。だが人間、怖いもの見たさではないが彼のある種の破れかぶれの自由に、放浪者や渡り鳥に、ふとあこがれる。

だから彼のことは以前から気になっていたが、長い文章を読む気になれずに映画から入った。それもつい2月ほど前である。だいたい世の中の真理、特に物理学の真理は一行の式で書ける。一般相対論だって量子電磁気学だって何だってそうだ。それを何十何百ページもないと伝えられない世界とは、一体何だろう。だから映画の2時間の方がまだ我慢できた。ちなみにレンタルだったがもう旧作になっていた。

一言で言って面白かった。私はなぜかニッチが好きで、自ら進んで山谷や日進町等を巡り歩いたりする。永遠に続く日雇いの港湾労働者、およそ希望も前途もない人間以下の環境、こんな人生などおよそしたくないし、私の貧弱な体ではそもそも出来る訳もない。だが、こんな境遇の中にあって、主人公の北町貫多が見せる「小心とプライド」の強烈なさく裂、これはただ物ではない。この本能ぎりぎりの正直さ、飾らない人間らしさを私は、もちろんこんな奴を友人になぞしたくはないものの、えらく気に入った。本能より強い物など無く、それは美しいと言うより意地汚い、ここまで意地汚いとあっぱれなほどなのだ。貫多と言う存在は、これまでの私の主張である「人の行動は全て、善なる本能に還元される」と言う主張に修正を要求するほど、強烈で動物的である。

北町の日々は重量物の、人力による運搬・整頓・倉庫入れと言う、機械の奴隷のような仕事の繰り返し、そしてそのための現場までの往復通勤、かき込むだけの朝飯と昼飯、日払いの賃金とそれで飲む酒と風俗、そして家賃滞納による強制退去の、ひたすら繰り返しである。であるが、現場の後輩には変に威張ってみたり、ちょっとした金に右往左往したり、イケメンを意味もなく憎んだり、でもそっけなくされると逆にすり寄ったり、出来れば彼女が欲しかったりと、およそ裸の人間を嫌と言うほどリアルに描き、かつ心理学者ほど詳らかに、それらの行動を客観的に分析しているのである。

彼が連続猥褻犯の息子と言う境遇でなかったら、おそらく程ほどの大学を出て、今頃平凡なサラリーマンなどしていたことだろう。まあ文才はあったが、そこまで平凡では書くネタもなかったことだろう。だから底辺に生まれたことは結果的には、長いトンネルの後の僥倖ではあるものの、総じて悪くなかったかもしれない。「犯罪者の息子＝堅気の人生はない」と言う図式に、実は彼は甘えていたと言ったら、言いすぎであろうか。

と言う訳で映画を見て一旦は納得したが、先日ふと突然に、「苦役列車」と言う題名に、日本語としての魔術師的なひらめきを感じた。私は下手だが俳句のまねごとをやるので、言葉を見つける難しさと見つけた時の運の良さは、多少なりとも知っているつもりだ。「言葉は必要悪だ」が持論でもあった。ところがそれをぶち破って、言葉で心象のレベルに入りこもうとする「苦役」と「列車」の組み合わせ、私はこれに目を剥いて、「ならば本文を読んで彼流の言葉づかいを見てみよう」と言う気になり、実際に彼の作品を読んでみた。

結果的には、彼の本文中に列車が何を暗示するのかのヒントになるような部分は無かったが、私はこの列車に、「頼まなくても時間通りに必ずやって来ては無慈悲に通り過ぎる、終わりのない無機質な労働と生活」を読み取った。あるいは、「毎日職場に強制連行する往復のマイクロバス」の象徴かもしれない。いずれにしろその抗いがたい冷徹な悪魔に、「列車」と言う言葉を思いついた彼には、やはり迫力と文才があると感じた。

さて、そうしてきた今の私に興味があるのは、「その後の西村賢太」と言うことになる。多少は金回りも良くなり、ステータスも確保できた。言わば当初の目的は達成し、もはやエリートを逆恨みする必要もなければ徒(いたずら)に偉ぶる必要もなくなった今の彼は、どうなっただろう。受賞当時の野良犬のような凄味の入った顔つきはどうなっただろう。変っても面白いし、変わらなくてもそれはそれで面白い。

と言うことで引き続き彼の、「棺に跨る」を読んでみた。こちらの作品は苦役列車の受賞より2年後に書かれた作品だが、苦役列車が彼の二十歳のころの回顧作品であることに鑑みると、その間には20年以上の時差があることになる。そして内容を見るに、「小心なくせにプライド持ち」と言う曲がった性格は依然として健全であったものの、多少は金回りが良くなったらしく、彼の誕生以前に死去しているが、やはり売れない作家のまま彼程度の年齢で発狂の上凍死した、藤澤清造と言う尊敬する無名作家の、墓を修理した上にその横に自分の墓を建立するなどと言う、世俗とも言える善行をやる余裕が出て来たりしていた。

もっともその行為の主役は、藤澤ではなく自分の自己実現であって、その意味で全くの善行とも言えないが、それでもそんなことをやる余裕が出てきたということだ。私としては彼のその「善行」が世間体や名誉のためでなく、全く自分のためであることに、むしろ安堵した。加えて依然として小心な上にプライドが高いと言う「彼らしさ」が全く失われていない、つまり俗物化していないことに安堵した次第である。人間、俗物化ほどの油断はない。

最後に、先日も取り上げたオーム真理教等のカルトの問題であるが、「自分で考えることを辞めてはいけない」、そう脱会者が戒めていて、それはかなり強力な処方だと思うが、それでも絶対ではない。現に、今も麻原に心酔している幹部たちも、自分で考えた上で自らの意思で麻原に帰依し続けているのだ。だがこの苦役列車に出てくる北町貫多、この人物はどう餌を吊るされてもおよそカルトの信者にはならないだろう。ぎりぎりの本能で生きている分だけ、生活に無駄な物には振り向かないし、勘はひたすら鋭いからだ。ここに、カルトを生む土壌である「相対の時代」にあって、「相対の中の絶対」を回答するヒントがあるようにも思えた。

8、心に染み入る四季自然

日本の国は美しい四季自然、即ち草花や山川、岩や滝、森や沼、それに加えて思いやりの人情や潔い大和魂、更には洗練されてかつ躍動的な八百万（やおよろず）の神々に囲まれ守られている。山に登った時、あるいはふと街並みを見たとき、また公園で息抜きをする時、更にはなじみの居酒屋で一杯やるとき等、しみじみと感謝の気持ち心が沸き上がってくる。そしてこれらの自然や人情の特徴は、「同じ物が2つとない」ことである。

それぞれが毎回違うからこそ面白いのだ。山も山ごとに異なり、思いやりも人や状況により千差万別だ。そこに幾何学的な合同や相似のような規則性があつたら、つまらないではないか。それにも拘らず私たちはこれらの自然や思いやりに、ほぼ同様に心のぬくもりを感じる。当たり前と言えれば当たり前なのだが、「違うものに同様の反応」とは、素朴になぜであろうか。

こういう疑問を提示するには、その背景から説明する必要がある。私は元来が理系人間なので、統一理論とか共通原因を見抜くように教育されているし、頭の構造がそう出来ている。そしてより上位の共通理由が見いだせれば、個々の事情はその統一原理で全て説明できる。ところが四季自然や思いやりに共通原因を探そうとしても、およそない。むしろそこに法則性や規則性があつたなら、逆に白けてしまう。だが人と言うもの、立場と言う人工的な設定を外せば、万物に同様のはずであろう。なぜ物理は共通性が美しく、逆に自然には多様性こそが美なのか、これが疑問の根底である。

そこで思考実験として、極限にまでばらばらな物を考えてみた。具体的には電話帳である。電話帳は電話番号と対応する所有者をただ羅列しただけの、およそ法則性のない物である。全くのバラバラと言う意味では四季自然や人情と同様なのだが、しか

し電話帳にしみじみと感涙する人はまずいない。一体この両者のどこに違いがあるのだろうか。

思うに四季自然や人情には、単に表象だけでなく、その奥により深い心象がある。花を見ては今の美しさとともにやがて散るはかなさを感じ、山を見てはどっしりとした安泰感と永続性を感得し、滝は枯れずに流れてそのまま心に沁み入る。人の思いやりもそれ自体がありがたいだけでなく、その人柄や状況の深みをも併せてもたらしてくれるのだ。しかも、もちろん感じるのは個々人であってその意味で主観であるにもかかわらず、異なる景色や思いやりに大抵の人が同様の感情を抱くと言うことは、そこに本能のほとばしりと言うか、人共通の性善があるということだ。

この「奥行きを感じ見抜く心象」、これが日本人の心の作動原理である。例えば山水画、基本は山や川や鳥等であるが、しばしば釣り人とか橋とか舟とか家とかも自然に溶け込んでいる。これらは人工物なのになぜ自然待遇なのであろうか。それはこれらが、設計図や工事人足や機能を感じさせずに、むしろ存在としてのもののあわれを感じさせるからだ。山水画が遠近法を無視して心象画の技法を用いているために、なおのことこれらが自然の側に行きやすいのだろう。もしこれが高速道路のインターチェンジであったなら、幾何的な造形美はあるいはあるかもしれないが、山水画にはおよそなじまない。

さて、ということで人は自然や人情に、その奥にある深みを心象として感じ、しかもその心象はほぼ万人共通であるとすれば、心象レベルに何らかの、あくまで蓋然的にはあるが、何らかの蓋然法則があるのではないかと思えてくる。この法則が見いだせれば、生まれつき日本美音痴で、イデオロギーに走りやすい、一種の病気の人々に、真の美しさを教えてやり治療することもできる。なぜならば、日本美の1つに気づけば、あと残りはほぼ自動的に好循環で気付けるからだ。せめて1つ、きっかけとして経験して欲しい。

その1つの経験の上に立つて言うのだが、その法則とは「謙遜の心」「捕らわれない素な心」「感謝の心」ではないだろうか。「心」と言っているうちはまだ法則と言う程に純化されていないのかもしれないが、敢えて恐れずに提起している。四季自然や人情はあるいは「頼まなくても勝手にやってくる」と思えるのかもしれないが、それがもし勝手や偶然ではなく実は「恩に着せない大いなる親切」だとしたらどうだろう。もし足ることを知りかつ自分に素直になるならば、日本の四季自然は、サハラ砂漠やツンドラのように人を突き放す物でなく、大変幸運なことに人を受け入れ抱擁する物なのだ。ただただ僥倖であり、人の側には何の勲もない。

さて、実はここからが話の本番のはずだったのだが、この心象レベルでの一定の法則、これがアルゴリズムに昇華しないだろうか。実はこの問題が私のライフワークである。そしてそのためには前段階として、「現象の代名詞化」が必要である。個別の心象でなく上位の代名詞になることにより事物は普遍化して、アルゴリズムに近づくからだ。もちろんここで代名詞化はあくまでも蓋然的なはずである。もし仮に確定的に代名詞化できるとしたら、それは四季自然の微妙な襞（ひだ）が「実は無い」と宣言していることに等しく、かつその宣言の瞬間からその人の心はイデオロギーとか特定の立場の肥溜（コエダメ）にはまってしまう。

蓋然的法則の一つである四神思想や風水、例えば街や城を作る時には「北に山、南に平野、東に川、西に沼」が良いとされるが、これは現実ではあくまでも柔軟に解釈されていて、実際は街ごとに景色が異なり、その異なりの襞があるからこそ旅や街歩きが楽しくなり、またその旅によって旅人は大和心の「しみじみ」をますます深めると言う好循環になっている。ただ残念なことにこの風水の例では、あるレベルでの法則化までは行っているものの、そこに演算を導入する余地がまだ見出されていない。あるいは街の中に中心部と言う小さな町があってそれらが入れ子になっていると言うことはあり得るだろうが、フラクタルと言ってしまってもうそれは襞でない。むしろ街の中の一軒の居酒屋に注目すると、その居酒屋がその街そのものでもあったりする。この発見の方が、心が躍る。

一般に演算が入る余地は、元になる「集合」とその階層が、大きすぎても小さすぎてもない。その意味で「大和心」と言う彩（イロドリ）は、ちょうど良い大きさのように思えるのだが。なおここで演算は＋のような繰り返せる物でなくてもよいし、完璧でなくてもよいし、全部を網羅する必要もない。これらの要件を要求すると結局、以前数体系について指摘したように、固まり過ぎで襞が入る余地がない。例えばエージェントの見方では、ある経験が大和心を1つ起動し、その大和心が別の大和心を起動すると言う、言わば累積要素があるが、それでもまだアルゴリズムとまでは届かない。もう少し考えたい。

9、気づきの法則

今まで、思いつくままに書き連ねてきたブログ記事に、一定の気づきのパターンがないか知りたくて、最近の気づきを要約しました。

瞑想録（その6）

- ・「意味を理解する(その2)」: 理解とは意味空間内の該当連続体の、タグも含めた位置決めのことである。
- ・「趣味の瞑想の行く末」: 人生の最重要事項は面白いことだ。役に立つ必要はないし捨てられても構わない。
- ・「暴論と暴談」: 理屈はしばしば、有無を言わさないこじつけであり、我田引水である。議論は、相手の土俵に乗った時点で負けている。
- ・「悟りについて」: 悟りとは矛盾こそ本質であると知ることである。仏教のイデオロギーの諸行無常は、日本では「もののあわれ」として受容された。アニミズムの心は、取り囲む四季自然の美しさに感涙することである。
- ・「汝殺すことなかれ」: 科学するとは殺すことであり、科学者は墓守人である。瞑想のファンタジーこそ人類最高の知恵だ。無用の用が人を活かす。
- ・「妄想が人を造る」: 蓋然論に立って初めて当たり前でない面白いことができる。思考の泉は妄想と雑念である。科学者はレンズ磨きの職人に過ぎない。
- ・「美と感動の構造」: 理解の本質は自己保存本能である。今はそれが昇華して、美や感動に変化した。忠臣蔵には涙するが、自分ではやりたくない。カルトと宗教の境界線は、究極的な状況で、教団と個人のどちらを優先するかだ。
- ・「中庸とアナログ計算機」: 融通、忘却、飽きる。これらは人生をリセットできる素晴らしい能力だ。機械や一神教では無理。中庸や応用動作はアナログで初めてできることだ。
- ・「デジアナ習合」: 人はデジタルとアナログと言う対極を、器用にも同時並行的に日々何気なく使っている。現代数学は連続体を点に潰した上で、連続体は点で出来ているとした「ファンタジー」(嘘)の上に出来ている。さらにどさくさまぎれに、集合と言う階層構造まで入れてしまった。
- ・「宗俗習合とイスラム」: イスラム教は宗俗が習合を通り越して融合してしまっているので、個人の自由がなく古い因習が外れない。キリスト教がリベラリズムに至れたのは、「使徒パウロ帰り」と言う誤謬のあだ花でしかない。
- ・「納得の仕方」: 予想を越える事実がポンと理解できると、深く納得して目から鱗が落ちる。意外性こそは深い智恵だ。
- ・「天気図と密教」: 事物のありようは「原状、言葉、数字」の3段階がある。上に行く程多機能になるが情報量は落ちる。数字を偏重する科学教は危ない。
- ・「科学は神聖か」: 「数値化できる」と「本質的である」は全く異なる原理であるから、科学はしばしば外れた所で厳密をやっている。SFは厳密から自由なので、しばしば科学よりも科学らしい。
- ・「先鋭化」: 中庸意識のない世界では極端な先鋭化が生じやすい。イスラム国も学生運動も共産主義革命も皆そうだ。中庸は極端よりも体得が難しい。

瞑想録（その6）

- ・「厳密の落とし穴」: 日常的な言葉であればある程、多用されてすりへっているために、厳密化できないと言う理由で科学から排除される。その結果科学は、大切なことから遠ざかっている。
- ・「若いときの怒り」: 出来上がった大人の常識は、科学的手続きも含めて、ぶち壊すためにある。
- ・「高等遊民」: 高等遊民は究極の無用の用であり、生き方と言うよりも美学である。新たな文明は彼らから生まれる。
- ・「数字は万能か」: 数字はしばしば本質を外す上に、致命的なことに現実に即応した拡張性が全く無い。事物の本質を見抜くのは智恵だが、ここで大切なことは事前に座標軸を固定しないことである。
- ・「大虚無」: どんなに面白いことでも、「やりすぎるとある日飽きる」と言う落とし穴がある。
- ・「許しの国日本」: 日本人は原理原則がないと言われるが、これは悪いことでない。加えて日本人には「許し」と言う高い文化、つまり原理原則がある。但し、許しても原状回復はしてもらう。
- ・「逆理の共通構造」: パラドックスには共通構造がありそれは「1回ひねり」である。逆理になるかならないかは、構造と言うよりも常識との対比である。逆理の単位は密結合しているので、それ以上分解しての解明はできない。
- ・「会社が嫌いだった理由」: 自分の理想郷は「グローバル＆ファンタジー」だったが、仕事と言う物はそのどちらかですらなかった。
- ・「占いについて」: 私は、科学を越えた真実の方がはるかに多いと信じているが、そうかと言って占いや超常現象を全て直ちに信じている訳でもない。
- ・「オーム真理教」: このカルトがやっていることは悟りや解脱ではなく、独善的なテクニクとしての「悟り技術」に過ぎない。当然に愛や思いやりなどは邪魔だし、そう考えている以上「第2のサリン事件」は起こり得る。

以上が最近の24記事のまとめです。全体として「当たり前と信じられていることにしばしば逆転がある」ことを主張しています。言わば「見えていないところにこそ真実がある」との気付きになっています。誉められていることが実は下らなくて、けなされていることに実はお宝が潜んでいる、そういう逆転こそ本当の気付きだ、どうも私はそう言いたいようです。

ところで私のごときはどうでも良いとして、こう言う気付きが智恵と言う個人差のある天賦の才能にしか期待できないとしたら、つまり学習効果とか効率良い伝達法とかはなくて誰もが自力で一歩ずつ積み上げていく物で、他の事例の応用などおよそあり得ないとしたら、これは人類の歩みは極めて心もとないことだと言うことになってしまいま

す。義務教育や経験はせいぜい「脳トレ」に過ぎなくて、現実社会では事象に当たるたびに出たとこ勝負で基礎から瞑想して、やっと「中の上程度の対策を打ち出せば良いなあ」と言う程に、心もとなく気まぐれで、また保証もないのでしょうか。

つまり私が望んでやまないのは、知恵の創造や伝達の、組織的系統的な仕組みです。アルゴリズムが見いだせれば一番良いのですが、「世の中は微妙な襞があるから面白い」「世の中が全部法則で見えてしまったらつまらない」との立場からは、こう言うアルゴリズムが存在しないことが、既に証明されているようにも見えます。

だからここで私が望むのは、蓋然的な智恵の道筋です。必ず当たる必要はない、またあくまでも骨太の部分だけで良いから、なにか蓋然的な仕組みや機構はないのでしょうか。もしかしたらその仕組みを見出すことが最高の知恵かもしれません。いずれにしても、素朴な疑問を大切にしましょう。やっぱりキーワードは「グローバル&ファンタジー」(グファ)です、大ざっぱかもしれませんが。「素直な心」と「裏をかく」、これらは仕組みとまでは言わなくても、キーワードくらいにはなりそうです、これら自体がそもそも逆理的ですが。

10、三回の開国

私個人は記紀神話を信じているが、いわゆる歴史として日本を振り返った時に、大きく「3回の開国があった」と思う。第1回目は聖徳太子による仏教の受容である。太子は聡明であったため論理整然とした仏教の妙味を理解できたと思うが、彼の仏教受容の決断はそれだけではなかっただろう。やはり為政者として、当時進んでいた中国(隋)の諸文化や諸技術や諸制度を導入したかったのだ。もし政治目的がなく単に仏教に帰依してこれを極めたいだけだったら、彼個人が出家の上で入隋したはずである。

仏教受容に関しては、有力豪族の蘇我氏と物部氏が争った。蘇我氏は開明派(受容)、物部氏は守旧(神道堅持)だった。私も心情的には物部氏支持ではあるが、当時の文化の落差を考えると、敢えてリスク覚悟で大局的に蘇我氏を支持せざるを得ない。そして幸いなことに、仏教受容後も神道や皇統はすたれなかった。この開国とともに始まったのが、神仏習合の風習である。仏教の側にも日本の風土に合わせる準備があった点は特筆したい。更に、以後続く遣唐使や遣渤海使(こちらの方が回数が多い)によって、日本はアジア全体に亘る世界観を得たのである。

第2回目の開国はずっと時代が下って、室町時代後半の戦国時代。当時日本は室町幕府が「流れ公方」となって有名無実となり、「何でもあり」の戦国時代に入った。折しも西洋では航海術の発展で、南蛮諸国が日本にも出入りするようになった。この流動の時代に出現したのが織田信長で、彼は形だけの武士道よりも実質を徹底的に重視する革新的なやり方で、今までの常識を覆して日本統一を図ろうとした。これは良く、一重に信長の異形の才覚に帰されるが、実は彼も、内外の時代の流動性と言う環境があってこそその才能を開花できた訳であって、もっと閉塞した時代に生まれていたらせいぜい謀反人だっただろう。同時代の上杉謙信が、優秀で清廉ではあるが義を捨てられず、結局時代を変えられなかった通りである。

この信長の改革を学んだ農民上がりの秀吉は、その変則的な氏育ちにより、あたかもマルクス主義をヒントにしながらもまるで別種のレーニン主義を唱えたがごとくに、信長より更に斬新でかつ徹底した思考様式により、日本を統一して更に大明国まで窺う程になる。さすがにこの野望は果たせなかったが、この秀吉の無謀を反面教師として、徳川家康は日本の内側の統一に専念した。この時点で西欧の諸技術の優越性は既に明らかであったので、もしこの時の為政者が聖徳太子の様であったなら、あるいは西洋に国を開いたかもしれない。

だがこの時に国を開いたら入ってくるのは仏教とおよそ異なる、唯我独尊のキリスト教であった。そして「宣教師→商人→軍人」と言う図式を鋭敏に感じ取った徳川三代は、損益を天秤にかけた結果鎖国の道を選んだ。鎖国とは開国の真逆であるが、むしろ「逆と言う密接な連関がある」と見るべきで、この鎖国を持って「第2の開国」としたい。ちなみにこの慧眼と英断がなかったら日本も西欧の植民地になっていて、もののあわれや神道と言った世界的にも貴重な精神が失われていただろうことは、やはり日本と同じく自然に恵まれていながら、まとめてキリスト教にもって行かれたフィリピンや、イスラムにもって行かれたインドネシアとマレーシアを見れば、一目瞭然である。

この逆開国のおかげで、日本は独自の文化を爛熟させて、元禄時代に代表されるような独自の「数寄者文化」を作り上げた。ただこの時代で不思議なのは、戦国時代と打って変わって「効率は二の次」のこの時代に、やはり効率はまるでなくて礼典ばかりの、貴族たちがなぜか台頭しようとしなかったことである。後醍醐天皇の時ですら短くはあったが建武の親政をやりようとした心意気の数分の一があればできそうだった事を、なぜか彼らはしていない。

こうして日本が200年の鎖国をしている間に、西洋の科学技術は著しく進歩し、鎖国時の予想を遥かに上回る勢いで、武力をもって日本に開国を迫って来た。そしてこの

タイミングに対して、徳川家は政権を投げ出して大政奉還をし、時代は明治の新政府に移っていく。いわばオールジャパン体制の皇室の親政である。そして、先の鎖国のタイミングも良かったが今回の開国のタイミングも、多分に偶然とは言え絶妙であった。より遅くてもより早くても、日本は土足で踏み荒らされていたことだろう。この明治維新を以て第三の開国としたい。

第三の開国では、仕方がないとは言えキリスト教も許容せざるを得なかった。抱き合わせ以外に西洋の諸技術を吸収する手立てが取れなかったからである。もちろん廃仏毀釈の様な反動はあったが、幸いなことに日本はキリスト教国にならなかった。江戸時代までにアニミズムが昇華して、確固たる大和心が根付いていたためである。そして日清日露の2大戦に辛勝し、続く大東亜戦争ではつい図に乗りすぎて敗退し、それでも植民地にならずに現代に至っている。もちろん敗戦直後にはキリスト教の流入とか左翼の興隆とか反動はあったものの、これも廃仏毀釈程度で、現在の日本は徐々に本来の大和心を取り戻しつつあると言える。

ただこの終戦に伴う民主化が、以前の3回の開国に匹敵する「第四の開国」と言える程大きなものだったかと言えば、私は「そこまでのインパクトはなかった」と思う。そもそも自ら望んでの「開国」ではない。強いて言えばこれから、おもてなしの心を通じて日本式の思いやりの心やもののあわれをどれだけ世界標準化できるかで、その大きさが評価できている。

最後に、こう日本の歴史をつらつらと眺めるに於いて、やはり豊臣秀吉の存在は一種異様であって、以上の「開国論」の枠の中に、どうも収まりきれない。彼は一体どこまでやれば満足だったのか。この点については別途の考察としたい。

11、ネット就活

ここ10年の間に、新卒の就職活動のやり方が大きく変わった。これは大学の就職課も言っていることだから厳然たる事実である。昔はリクルート雑誌や先輩から、限られた情報を聞いて、その中から数社を選び、先ず人事課に電話をして出願書類を郵送してもらうことから始めた。だが今は、SNS的な「ナビサイト」があって、無料登録するとクリック1つで膨大な情報が手に入る。出願の意思表示もエントリーボタンをクリックするだけだ。中には「業界まとめてクリックボタン」と言うのもあって、1クリックで10社以上にまとめてエントリー出来てしまう。この業界の最王手はマイナビとリクナビだが、それ以外にも中小合わせて20以上のサイトがあって、それぞれ業界や会社規模や募集エリアを限定するなど、特色を出している。

さてこのナビサイト方式、昔の牧歌的なやり方に比べて随分とスマートになったし、ネット時代の到来を考えれば当然のビジネス展開ではあるが、良いことばかりではない。簡単にエントリー出来、さらに会社説明や面接にも情報が行き渡って行きやすくなった反面で、一人が100社以上もエントリーするために、募集人員の100倍や1000倍の学生が応募することも日常茶飯事となった。そうすると採用側の人事課員もいちいち真面目に話を聞いていられない。書類選考と称して足切りをして10分の1に減らしてもなお数十倍の学生と面接をしないといけなくなる。いきおい選考過程が粗雑になるために、採用と言う現象が多分に宝くじを当てるようになり、いきおい学生たちもより多くの会社にエントリーするようになるという悪循環に陥っている。面接を受ける学生もマニュアル化しているが、企業がネットに載せる会社概要もきれいごとばかりで、似たり寄ったりだ。

しかも運良く採用されてもそれは宝くじだから、志望度が強い会社でない場合が多いが、でもそう何回も宝くじに当たる物でないから、そのたまたま当たった会社に入社することになる。でもどうしてもモチベーションが沸かなくて、そうして苦勞してやっと入った会社を、新入社員の約3割が3年以内に辞めていくと言う。そして新卒ナビサイトを運営している会社は大抵「転職ナビサイト」も運営しているから、ナビ会社はまたそこで儲ける仕組みとなっている。結局「魔法の靴」よろしく、学生と企業は否応なくナビサイトに踊らされて、ごっそり儲けられる仕組みになっている。これはかなりおいしいビジネスモデルだ。そしてナビサイトも企業だから、儲けるためには他人の迷惑など眼中にない。まさに狂想曲である。

この悪弊は最近特に指摘されているところだが、一体どう考えたら良いのだろう。この悪弊の位置づけと対策を、似たような業界との対比で考えてみる。先ず大学入試だ。大学入試システムも最近はかなり電子化されてきた。その結果情報も得やすくなったし出願も遠隔からネット上で出来るようになった。ただ入試自体はその大学に足を運ばなければならないこと、入試のタイミングはほぼ集中していること、出願と選考に相応の試験費用を取られること、結果は点数と言う数字で決まるので自分がどの程度なら入れそうか事前にかなり予想と戦略が立てられること等があって、今でも競争率は高々数倍程度である。

この事例を鏡とするならば、機会均等であるべき学問でも選抜に係る支払いがあるのなら、企業面接で志願者から経費を請求しても、さほど問題はなさそうだ。企業としてはこれで間接費を賄うと言うよりは、志望度の高い学生に自然淘汰されるのが狙いになる。このような「自律的交通整理」には、訴訟の例がある。弁護士を雇うのにバカに

ならない金がかかるために、いきおいつまらない訴訟は淘汰される仕組みだ。ただそれでも大学の先生方は「最近入試関係の雑用が増えた」と愚痴っている。

次にお見合いナビサイトと比較してみよう。就職と結婚は類似例として良く対比されるし、お見合いについても会員制ナビサイトが充実してきている。こちらの業界の特徴は、会費等の名目で結構な金を取ることに、書類の交換の仲介をメインにしている「個人面接」のような人海力を要しないこと、そして何よりも、結婚は出会いと恋愛が主力でナビサイトは脇役的な補佐に徹していることだ。この業界を鏡として得られる教訓は、第一に企業がナビサイトに頼り過ぎないこと、情実採用や大学差別はまずいが、もっとリクルーターが自ら出会いを演出するような努力があっても良いのではないか。第二に、会社と学生の意思疎通の方法だ。どちらも建前しか言わない「化かし合い」になっている。もっと本音を出し合う工夫が要る。

次に学習塾や予備校業界と比較してみよう。この業界の特徴は、本来文科省管轄の正規の学校教育があり、建前上は不要なところ、現実には言わば必要悪として、経産省の管轄で存在していることだ。この業界も電子技術を極限まで利用していて、授業は基本的にマスプロの映像またはネット授業であり、講師の多くはネット受講後の疑問回答に徹している。この業界を鏡にして見えてくることは、まずSNS等電子技術は基本的に省力化の強力なツールであって、利用方法次第で全体的な利便性は大きく向上すると言う点であり、第二にビジネスと見るならば効率重視で荒っぽいことも許される点だ。ネット就活もSNSに限らずに、わざわざ会わなくてもネット上のやりとりでデジタルに処理できる方法、例えば意味理解とか文脈解析等の技術をもっと多用すべきである。ただし電子化のおかげで職を奪われている知識階級も居ると言う側面も無視できない。

ネット就活の話为例に、「技術進歩は貧富の差を広げるか」と言う問題にも触れてみたい。ちなみにピケティ先生は肯定の立場を取っている。たしかに大手ナビサイトを見ると、この新規ビジネスモデルの確立は技術進歩のお陰である。そしてこの進歩の恩恵はもっぱらその大手ナビサイトがごっそりもっていつているし、特許等の知的財産保護の法律もこの傾向を是認している。加えて技術進歩の影で消滅する職種もある。つまり短期的に見れば技術進歩は貧富の差を広げる。しかし特許権は20年で消滅するし、どの技術でも長期的には拡散して行ってそこに競争原理が入りこみ、独り勝ちの時期はそう長く続かずに進歩の恩恵のみが社会に残る。技術進歩が経済成長に寄与するか否かは基本的に、増と減のトータルで見ないといけないが、介護のような内向きの業界もあるものの、多くの場合増が優っている。つまり技術進歩は貧富の差よりも富の総体を増加させる。

結局就活ナビサイト、これは日本特有の終身雇用制度と抱き合わせなのだ。終身雇用でなければ新卒就活がこれほどにも過熱しない。現に転職が当たり前で実力主義の米国にはこのようなシステムはない。それに、「一旦起こった技術進歩を止める」と言うことは、自由主義の国では不可能だ。だから就活狂想曲も工夫しつつ使い、良識と常識により平均化していくことを期待し、新卒生も人事課員も慣れて行くしかないだろう。

最後に、ナビサイト会社を集積されたビッグデータとしての膨大な情報であるが、ブログやSNSと同様に利用者は「タダで便利」と喜んで使っているものの、サイト運営会社にとってこれらのビッグデータは、ただで手に入れた宝の山である。自社サイトの改良向上のためのノーハウとして用いることはもちろん、本当はいけないのだがおそらくこっそり販売していることだろう。商売とはそのようなものだ。つまり就活生も一般の会社も、踊らされた上でさらに知らないところでカモにされている。残念だが社会と言うのはそのように出来ている。

12、旅と酒

私がこれまでに、それなりの人生をやって来て辿りついた自分のための自分の境地をスローガンで言うならば、「グローバル＆ファンタジー」（略してグファ：GFA）である。そしてこれを具体的に言えば、究極的には「旅と酒」だ。場合によってはさらに「書」や「友」が入るが、これらも究極的には「旅と酒」に集約される。もちろん人の趣味は様々で、あるいは撮り鉄、あるいは寺社巡り、あるいは音楽演奏、あるいはスポーツだったりするが、これらの人々でも究極はと言うと「旅と酒」になる人は多い。そこで、本記事は学問ではないのであくまでも私個人の場合の、「旅と酒」の魅力を考えてみる。本日は言葉にならない心象を敢えて語ろうとするために、いささか唇が寒いかもしれない。

旅によって目覚めたあるいは多様な成長を遂げた歴史上の人物や文化人は多い。先ず神武天皇や日本武尊（ヤマトタケル）、万葉集の相伴旅人や額田王（おおきみ）、次第に下って在原業平、西行法師、松尾芭蕉、江戸末期では林子平も吉田松陰もみな旅でその思想を大きく展開している。更に近世になると柳田国男、あるいは中村草田男や種田山頭火等、主として敢えて中央に背を向けた詩人歌人に、旅の影響は濃厚だ。奥の細道の冒頭の「月日は百代の過客にして過ぎゆく人もまた旅人なり」、これは旅についての最高の賛歌である。

果たして旅のどこに、それほどの魅力と魔力があるのだろうか。第一に思いつくのはその地方それぞれの文化や人情の違いや多様性だ。地方ごとにそれぞれの山があり川があり海があり、特産品がありグルメがあり、それらは一々多様な上に2つと同じ物がない。これは次の目的地をして、「今度はどんなことに巡り合えるか」との期待を抱かせる。もちろん期待通りの地方もあればそれほどでもない地方もあるが、それもそれぞれのお楽しみの一環である。そして巡る地ごとにその産土神や土地の人情、いわばもののあわれに接し、知的満足を得るのだ。

私は個人的には短めの旅が好きだ。日帰りか長くても3泊くらい。しかも泊まる時はできるだけ、往復は深夜バスで宿泊はカプセルホテルを優先する。これは安上がりでかつ一日を長く使えると言う実用性もあるが、やはり気軽さと異空間の楽しさだ。私は旅先での出会いは、それが寺社であろうと道中の同行であろうと、一期一会を好んでいる。余り深く付き合うとどうしても相手の裏の面が見えてしまう。旅はあくまでもファンタジーなので、楽しいうちに分かれるのがコツと弁えている。加えてグローバルの立場からは、2度同じところに行くよりは、遠くても良いから出来るだけ別の所に行くことにしている。第一印象でかなり分かるところも多いので、出来るだけ多様に回りたいのだ。

それと回る時には単に表面だけを見ない。寺社では歴史を知り、旧跡では由来を知り、食堂では土地の産物に耳と舌を傾ける。こうした深掘りが、言わば縦糸と横糸になって、その土地の味わいをますます立体的なものにしてくれるのだ。場所的には広い大自然も、狭い横丁も、どっちも味わいがあって面白い。歩きもバスも電車も、それぞれの味わいとスピード感がある。ただ本心では、既成の道に制限されずに、地球上のあらゆる場所を歩き掘り起こしてみたいと言う、原理上不可能な望みも持っている。

さて、次に酒。これも文学にずいぶんと謳われている。中国の詩人の杜甫は「百甕（ひゃっこ）の酒」と言った。中国人得意の誇張はあるものの、酒をこよなく愛して、あの有名な漢詩をたくさん書いたのだ。最近では風流人の大島桂月も、「酒なくて何の人生だ」と言った。作家の山本周五郎も、昼間に著作した後の夕餉の酒を楽しみに日々を送っていたと言う。漫画家のはらたいらも、生前は彼の作品を酒場で受け取るのが常だったと聞いている。阿久悠作詞で矢代亜紀が持ち歌の「舟歌」、「ホロホロ吞めばホロホロと♪」なんか、現代版の歴史に残る酒賛歌だ。

酒のどんな作用がそこまで人を引き付けるか。酒には脳をほぐす力がある。脳で生きている人類にとって、この作用は極めて偉大でありかつ神秘的である。酒により他人になれ、また酒により地上の人々や事物を別角度から広く俯瞰できるようになる。素

面(しらふ)の時には見えなかった、幻想に近い美しさと微妙さが見えてくる。これは古代に於いてシャーマンが至ったに近い境地である。更に酒は人の間の垣根も取り払ってくれる。その結果、愚かな人間はますます愚かに見えてくるが、そう言う輩とは付き合わなければ良い。そして本当に素晴らしい人や物だけが輝いて見えてくる。酒も我々に、この世のもののあわれと人生の深みを教えてくれるのだ。

こう見てくると、旅も酒もある意味共通であって、視野を広げ、好奇心をくすぐり、別の人生を教えてくれ、自然や人情の素晴らしさで包んでくれる。この作用は人の良き本能の欲求に直結している。とするならば、旅と酒の両方の要素を持った居酒屋は究極と言うことになる。私も居酒屋や深夜食堂の雰囲気が好きだ。良い居酒屋には日々の良いもの全てがある。逆に日々の地域の人間模様は全部まとめて一つの舞台、即ち一つの居酒屋であるとも言える。居酒屋は出来ればチェーンでない方がよい。店構えや店主の人柄や客全てが一様に登場人物だからだ。

とは言え若いころとは異なり、今の私は日々の酒をむしろ自宅で楽しんでいる。「風呂→酒→寝る」の一直線が今の私、つまり昼間には仕事にならない程度の知的な楽しみとしての瞑想をし、その達成感で夜に酒を頂いて気持ち良く寝ると言うサイクルが、丁度今の自分の身の程に合っていて心地よい。多量の酒は要らないが、その代わり休肝日を設けずに毎日頂いている。この境地が今の私流の「足ルヲ知る」なのだ。居ながらにして毎日満願全席、酒池肉林である。勝手気ままなので、明日はどういう楽しみ方になるか全く無計画で、次の朝に起きてから決めることにしている。こう言うのを晴耕雨読と言うのだろう。酒の肴は、徒に山海珍味でなくても、ある物で良い。今は良い時代で、およそまずい物など無い。また、利き酒ができる程に舌が肥えても居ない。時には自分で小皿を作ると言うようなバリエーションも楽しんでいる。

キリスト教の一部とイスラム教の人々は、戒律で酒が飲めない。かわいそうだと思う。酒の世界を知らないのだ。人生楽しさも半分だろう。およそ意味のある戒律だとは思えない。その点神道は、神様も酒を飲む程で、極めて人に自然である。「人に自然」、これこそが「相対の中の絶対」であると思う。もし年を取って足腰が立たなくなりかつ医者から飲酒を禁止されたら、私は迷うことなく尊厳死を希望する。

13、何にもなっていない

仏教はもともヨガ(バラモン教)を基盤に、「執着と苦しみ」に特化して成立した教えであるが、元のヨガにおける究極の境地とは、「神(天)と自我の合一」である。「自分の中に天があり、天こそ自分自身である」と言う気付きだ。天はもちろん完全無欠で

特定のどんな物をも超越しているから、天と合一した状態とは、「特定の何かではない」状態を意味する。例えば「私は課長だ」と思った瞬間に、あなたは墮落して死ぬ。天より低い特定の物に自分を固定し、かつそれ以外の特性を全て捨てているからだ。

分かりやすい例を挙げよう。あなたが中華屋でラーメンを注文したとする。これは日常のごく当たり前の何気ない行為だが、実は「タンメンを食べる」「ニラレバ定食を食べる」「フレンチのコースを食べる」「食べずに遊びに行く」等々の、無限個ある他の選択肢を全て捨て去ると言う、実は非情に恐ろしい行為を無知にも行っているのだ。この例のように天との合一とは、「特定の何にもならないこと」である。これはたしかに先入観のない、素晴らしい境地である。剣術でも念流と無念流があるが、先入観なく相手を観ずる無念流の方が、優れているし勝つ。

ところで世の中には「立場」と言うものがある。そして同じ現象であっても立場によってその判断が異なる。例えば女性の裸は法的には犯罪だが芸術としては美だ。このように同じ物が立場によって異なるのは今述べたヨガの立場からは、人が不完全で煩惱の塊だからうっかり犯してしまう間違いである。とは言え現実には、何らかの立場に立たないと事項の表明が出来ないし、その表明を聞く方もその表明者がどの立場に立っているかで、その表明の適否を判断する。この意味で立場とは、言葉やイデオロギーや宗旨と同じく、一種の必要悪と言える。

科学や法律等の公益的手続き、これらも客観性を保証するためには、よって立つ立場の明確化は必須である。だが、この必須が同時に結論や分析対象の範囲を狭めることになる。客観的に表現できない物はいくら重要で身近であっても、解明できないし証拠に取り上げてもらえない。いくら「見ました」と言っても、物証がないと信じてもらえない。

以前に顔認証を例に挙げて、「顔認証技術は地球人全員を判別できる程高度に発展しているが、それでも人相学的な預言はできない」と説明したが、占い等の超科学が科学よりもしばしば深く洞察する根本がここにある。つまり顔認証は計測する軸（眼と眼の間の長さとか、鼻と口の距離とか多数の指標）を事前に定めておいて、その定めた物差しに合わせた多量で正確な数字群で人の弁別を行っているところ、手相や人相を見る達人はそう言った事前に定められた予断なく、一人ひとりの特徴のあるポイントを予断のない心象により抽出して、それで予言している。つまり超科学が科学よりもしばしば優れている理由は、冒頭で述べたヨガの悟りと同じで、特定の予断がないことなのだ。このポイントは世の中では余り強調されていないが、決定的である。ただしあくまでも心象レベルの判断になるために、「根拠を明示しろ」と言われても、「勘と

経験と知恵です」しか答えようがないし、また占いの当否にはどうしても主観が入るので、話がややこしくなるが。

ところで最近、「ビッグデータ」と言うことが言われている。電車に乗る時の改札口でのICタッチの際のデータ群とかツイッターのつぶやきの総体とかが典型だ。今まで垂れ流されていた多量のデータが、電子情報技術の発達により集積できるようになったので、これらを解析することにより一定の法則を見出して産業に貢献しようと言う新分野だ。そしてこのビッグデータ、分析法はデータの具体的な形態により様々だが、分析の際に「仮説を立てる」と言う行為がどうしても不可避である。

本来なら、不特定多数の勝手なつぶやきがそもそもの分析対象なのだから、仮説を立てるなどと言う予断なしに、それこそヨガの無我の境地で分析した方がよっぽど素の大いなる成果が得られるのだ。だが、全体像が一目瞭然でない程データ数が膨大であるからこそビッグデータと呼ぶのであって、仮説なしではおよそ手を付けるきっかけがない。そしてその代わりに、「解析後に仮説の確認をする」と言う手順を取って仮説を確認するのだが、この自己正当化が多分に「手前味噌」だ。例を挙げると、『 $x=x$ 』と言う式の x に1を代入したら成り立ったからこの式の解は1だ」と言っているようなもので、実は2でも3でも成り立つ。

ただ、話を産業応用に限れば、欲しい答えは究極的には「どうしたら売れるか」だけだから、予断ある解析でもその欠陥は致命的と言う程でない。さらに工業プラントのプロセスデータ、これも典型的なビッグデータだ。そして人工物の場合はセンサーを事前に、データが欲しい所のみに集中して配置することにより、もちろん実は事前に答えを制限してしまっているのだが、さらに効率良く多量のデータが取れる。まあ、そうして得られたビッグデータの分析結果は、意外というよりも多分に現状追認とアリバイ作りであろうが。

世の中には「専門」と言うものがある。そしてデータアナリストたちはそのそれぞれの専門に従って、機械屋なら温度と圧力を、電気屋ならば磁場と電場をというように、教え込まれたとおりに偏った物の見方で仮説を立てるであろう。最悪である。そしてこの弊害が目立ちすぎる場合はプロジェクトチーム(PT)を組んで互いに補完し合うが、それでも既存の常識を越えることはできない。

ビッグデータの例でも、深く新たな結果の抽出には、既成の常識や枠を越えた能力が実は必須だ。私が今までの記事で取り上げた、紫式部、西行法師、兼好法師、上田秋成、そして西村賢太と言った人たちはそう言う希な人たちである。ただ単に「従来の

枠を外せば良い」訳でもない。プロの弾くピアノはワンパターンでつまらないが、だからと言ってまるきりの素人にピアノを弾かせても大抵めちゃくちゃである。つまりある程度の型は必要悪であってこれを越えることが大事なのだ。手相や人相だって基本的な知識の習得は必要である。

そろそろ本日のまとめに入る。ビッグデータを、手相や人相のようにあるいはヨガのように、仮説や予断なしの素で見ることができたら、これは真の宝の山だ。きっと人類に、新たに高い知的資産が追加され得るだろう。従来にない「高い悟り」も出現するかもしれない。この始まりは一重に、既成の立場や物差しからいったん離れて、直観と知恵を働かせることにあるのではないか。天賦の才のある人が素になって無我の境地に入れば、実はかなりのことが見通せると思う。ここで大事なことはその気付きの根拠を問おうとしないことである。心象瞑想とビッグデータはいつか合体する可能性もある。どちらも蓋然法則の導出でありかつ相互補完的だからだ。

14、徒然草

現代語訳で徒然草(つれづれぐさ)を読んだ。徒然草は義務教育でも習う、誰でも知っている高名な随筆文学である。私がこの本を読んだのには、実はちょっとした下心があった。この本が「暇にまかせての日々の気付きや思いつきの雑記帳」であることは知っていたので、同じく思いつきを日々アップしている私のブログ活動の何か肥やしや指針になることはないか、そして可能なら私のブログを向上させるきっかけにならないかと言う気持である。

そして読んでみて気付いたことは、第一にこの作品が言わば「元祖ブログ＆ツイッター」であることだ。実際240余ある「ブログ記事＆ツイート」の一つ一つに、必ず何らかの気付きや教訓がある。ただ、この本のトータルとしての思想や全体観は何なのか、もっと言えばなぜこの本が義務教育で教えられる程に重要なのか、分かりにくかった。例えば「平家物語＝諸行無常」とか「西行法師＝もののあわれ」と言った、そう言ったスローガンが見えてこなかったのだ。

そもそもこの作品は論文や純文学ではなく、むしろ日記に毛の生えたような随筆なのだから、まとまりがないのは当然なのだが、義務教育に取り上げられるほどの価値と何なのか、自分の瞑想はもちろんのこと、ネットをいくら検索しても出てこなかった。そこで視点を変えて著者の人物像を見ようとした。著者の吉田兼好だが、生きた時代は鎌倉末期から南北朝の比較的混沌とした時代である。混沌と言う意味では西行法師と似た時代にある。そして「混沌を避けるが賢者」とばかりにさっさと出家隠遁した。

だがだからと言って仏道にさほど熱心な訳でもなく、むしろ暇の塊だったようだ。徒然草を書いたのも一種の暇つぶしだった訳である。

吉田兼好、別名ト部（うらべ）兼好とも言うが、吉田にしてもト部にしてもこれは神道の名家の姓である。その「元祖神主」が若くて出家した。でもだからと言って彼の言動に神仏習合や修験道の影はない。また、彼のブログ記事を見る限り、この人物は「大して苦勞せずにチョイナチョイナで悟りに至った」との感触がある。つまり理屈に走りすぎずバランスの取れた、言わば「器用な利口者」なのだ。美意識も極めて高いが、源氏物語に見られるような貴族趣味ではなく、もっと現実的だ。それに何か人生を斜に構えたようなところが鼻につく。

まあ、仏教の悟りとは「表なんて裏なのだよ」のようなところがあるから、悟ると誰でも多少は斜めに見る傾向は出るのだろうが、兼好の場合は鼻につくほどだ。そして「理解が目から鼻に抜けて、かつ世の中に斜に構える」、これはAB型の典型的な特徴だ。証拠はないし今さら調べようもないが、彼をAB型だと仮定するとこの書き物の全貌が極めて良く見通せる。

徒然草は枕草子、方丈記と並んで「三大随筆」と言われる。ところが徒然草に方丈記に関する言及は全く無く、枕草子に至っては「コギヤルのパツパラな気付き」程度の否定的な評価しかしていない。裏返すと、「自分の気付きが実は最高さ」と言うひそかな自負があって、これもまたAB型説を支持する。「世の中に偉い人や物なんかないのだよ」とか「愚か者は毛虫ほど嫌いだ」とか「趣（おもむき）が分からない奴はクズだ」と言った感じが、つぶやきに陰に陽に見え隠れする、この辺もまさにAB型である。

では原点に戻って、このような作品がなぜ義務教育の対象なのだろうか。私が思うにそれは、彼の気の効いた多くの気付きや美意識、あるいは向きにならない程度のほど良い諦観や諸行無常の捉え方が、あくまでも総合として、「程良い日本人」を育成するちょうど良い教材だと言うことではないか。つまり彼の「日本人意識」が、肩肘を張らずに穏やかで取り付きやすい、言わば「余裕の発露」とでも言うものになっていると言うことだ。彼自身はことさらに何も「発明」してはいないが、それ以前の賢者たちの諸発明を総合して分かりやすく体現している、今の売れっ子で言えば池上彰さんのような位置づけではないかと思われる。

240余ある彼のブログ記事の中にあって特に有名で学校で習ういくつかの小話、「仁和寺にある法師」とか「一矢にて定めるべし」とか「折節の移り変わる時こそ」などはいずれも、①丁度読みやすい長さなので学習しやすい、②それなりに落ちや教訓や美

意識があるので授業にふさわしい、という理由で選ばれたのであろう。ただしこれら3つの小話を以て「徒然草を理解した」とは、他の書き物以上に言い難いのだ。ブログとかツイッターとはそもそもそう言うものだろう。

全体として兼好は、良く言えば余裕で、悪く言えばテキトーに、人生を過ごしていたように思う。但し気付きや美的感覚（格好の良し悪し）は鋭い。その意味で「元祖知的遊び人」である。気付きは切れ味が良いが、それらを生かそうとか後世に伝えようなどと言う気はさらさらしない。むしろ愚かな常識をバカにしている。愚か者の力み返りを、仮に正しい目的であっても、強くバカにしている。そしてあたかも論語の「己の欲するままに従えどもその範（のり）を越えず」の境地に至っている。一言で言えば「賢者の自然は自ずと良く、愚者の賢者のまねほど醜い物はない、そして賢者など自分を含めてごく少数さ」とつぶやいている。一言で言えば彼が提示したのは、「鬼気迫らない気楽な大和魂」である。そしてもし彼の和魂が主流だったら大東亜戦争や特攻の無茶もなかったのではないと思われる。

良く「ブログの出現以前にブログ形式であった」と評される文学に、林芙美子の「放浪記」がある。これも別に難しいことを言っている訳でないのに、極めて読みにくい。それは読者が、「前後の繋がりや全体像を見極めるのが理解だ」と言う暗黙の心構えで読もうとするところ、記事をつなぐ「糊の部分」が完全に欠落しているからだ。つまりブログの集合体だからだ。

もっとも大抵の人が他人のブログを読む時も、コンスタントな友人の記事ならともかく、検索でヒットした程度ならヒットした記事にしか用はない、それで十分役に立っている、私だって、仮に徒然草が誰か知らない人のブログだったら、それが実はありがたいブログ集であることには気付かずに、2, 3の記事を読んで別の所に飛んでいることだろう。ブログとは基本的に書き放しで読み放しであって、ほとんど誰も全体像を知ろうなどとは思わない。

さて、こう言った観察を元に本日の記事の本来の目的である、「私がブログ運営の上で兼好に学ぶこと」に、何があるだろうか。先ず「仕事にしないで暇にまかせてやること」、これは実践している。次に「何かしらの気付きや美意識があること」、これも自分では「1記事の中に平均4つは気付きがある」つもりで居る。第三に「短文で明快で読みやすいこと」、これはどの記事もMSワードの3ページ以内に必ず収めている、文章がこなれていない欠点は認めるが。

私のブログ記事の徒然草と類似している点を敢えて挙げるならば、芽たる気づきの発展可能性と、逆にその気づきを掘り起こす困難さだろう。そして全体像も見出しにくい、これは多分に黙示文学のせいだろう。徒然草が私に教えてくれること、それは、「それが随筆やブログの運命さ」と言うことだろうか。

15、イスラム国と宗教改革

イスラム国と宗教改革、前者はこちこちの原理主義の、他人の迷惑や良識無視の殺人暴力集団で、他方後者はキリスト教の直接には1人も殺さなかった、むしろ改革側が殺された静かな宗教純化運動であって、同じ宗教がらみとは言いながらおよそ対極にあるように見える。だがどちらも一神教ならではの原理主義改革と言う意味では、実は似ている。

先ずイスラム国の立場をブリーフすると、他宗教の影響は一切り捨てて、純粹にアッラーの命令にのみ従うことを本旨とする。キリスト教とは当然敵だが、100年前のオスマントルコ敗退に伴うアラブ独立は良いとして、その時に独立国家となったイラク、ヨルダン、シリア、サウジの4国も、キリスト教国が定めた分割案に従っているために、不届き者の不純分子と言うことになる。そしてこれらを全部地上から抹殺するのが、真のイスラム信仰者の務めである。これほどに宗教的に頑迷でありながら、ネット技術を駆使して世界中から同志をリクルートするなど、西欧文明の都合の良い所はちゃっかり利用している面もある。ネットの寵児でもあるのだ。

次に宗教改革をブリーフすると、十字軍に伴って東西交易が盛んになったキリスト教圏では、先ず交易が発達し、その富で古典文化や他文化を吸収してルネッサンス(文化再生)運動がおこり、これがカトリックの独善専制に風穴を開け、主として知識人階級が主導してリベラリズムの一環として、キリスト教の原点回帰運動としてのプロテスタント(抗議する者)運動がおこった。象徴的なきっかけはルーテルによる聖書の現代語訳であるが、ヨーロッパ中のあちこちで色んな有名無名の人物が同時に狼煙(のろし)を上げた。彼らに共通なのは「教皇打倒」、併せて「専制君主打倒」である。タイミング良く活版印刷術が開発されたが、彼らも調子よく「当時のネット」をフル活用している。

これらのブリーフを比較して分かるように、両者は表面的な暴力・非暴力を除けば、他人や非同志の思惑無視のギンギンの原理運動であり、しかも当時の情報拡散の最新技術を用いている点で、極めて似ていることが分かる。そもそも原理主義運動は、旧来の全てを否定する余り、非暴力の常識も捨て去るから、暴力に訴えるのが普通

である。日本の学生運動も共産主義革命も、あるいはガンジー暗殺を見てもそれは分かる。主張の極端も特徴で、例えば、原理主義的なユダヤ教徒はお国の存亡をかけた中東戦争の際も、「イスラエル国などは世俗に墮落しているから潰してしまえ」と、わざわざパレスチナに激励した程である。原理主義とはこういうものだ。しかもその革命たるや、共産主義革命でも理論的にはそうであったように、世界同時革命でなければならない。原理主義の言う「完全」とは「世界全部まるごとまとめて」だからだ。だから、以上の観点からはイスラム国の方が普通であって、「宗教改革はなぜ暴力に訴えなかったのか」をこそ、問うべきである。

宗教改革が暴力に訴えなかった主な理由は、思うに2つある。第一に宗教改革は文人の知的活動として始まったために、そもそも力がなくてふるう暴力もなかった。決してイスラムよりも良心的だったのではなく、単に無い袖は振れなかったただけだ。力があれば暴力をふるっていただろうし、実際プロテスタントが成立して後の宗教戦争では、あくまでもキリスト教の内部抗争ではあったものの、総計で何百万人の兵士や義勇兵の命が失われている。その原点は原理主義的憎しみに、世俗の利権が絡んだものである。

第二に、イエスの公生涯はたったの3年半だったが、ムハンマドの活躍期間は50年にも及んだことだ。この設立者達の違いも大きい。3年半では暴力をふるう暇もなかっただろうし、暴力的な同志を多数集める暇もなかっただろうが、50年も活躍すればそのころ既にあったユダヤ教やキリスト教とも闘ったし、在来の多神教系偶像崇拜とも闘った。ムハンマドの勝利を決定づけたのは、当時の偶像崇拜の中心であったメッカにおける偶像神殿の徹底的破壊と偶像神官の皆殺しである。この前例に今のイスラム国は見習っていると言える。

もう一つ見逃せないのが、先のキリスト教文化圏のリベラリズムの結果として生まれた、相対的価値観である。相対的価値観では、キリスト教とイスラム教は相容れないが、どちらがより優位と言うことはないと考える。だからイスラム国は、西欧諸国の常識では残酷に見えるかもしれないが、彼らは彼らなりの「愛」に基づいて行動しているとも考えられる。この辺はオーム真理教とも共通している。例えば文化財のぶち壊しも偶像崇拜禁止の立場からは当然であるし、異教徒の首切り処刑だって、もしかしたら「なぶり殺しよりも一瞬なので苦痛は少ないから愛だ」と考えているのかもしれない。「自由平等博愛」などは異教徒のキリスト教が発明した物なので、全く無視するのが即アッラーへの忠誠の証である。

ところで私が以前から主張しているように、人には自己防衛本能と言う生物学的に自然な能力がアприオリに備わっているはずなのに、なぜイスラム教はこのような、自分がされたらさぞ嫌だと分かるような「暴力的イデオロギー」の善悪を判別できないのだろうか。それは彼らが、物心がつく子供のころから教義を刷り込まれているために、疑うと言う行為が封印されているからだ。もっともこれはキリスト教も似たようなものだが。理屈より心象を大事にすると言うことが出来なくなっている、これは不幸である。心象と本能のブレーキさえなければ何でもやれてしまう。紅衛兵みたいなものだ。

ではそもそもこのような非人間的な一神教が、なぜ人の本能を圧殺してまで広がったのか。それはこれらの一神教が、イデオロギーの理屈をこねる分だけ、論理や言語や基礎工学と言った、一定の教育と実益をもたらしたからだ。この実益が原始的アニミズムの世界にいた未開の異教徒には魅力的だったのである。現にイスラムを占領支配したモンゴルやトルコも、宗教的には早晩イスラムに改宗したし、ローマだって豊かなローマ神話を持ちながらもこれを捨ててキリスト教に改宗してしまった。ただこれらの実益も実際はこれらの宗教の許すところまでで、それ以上に進もうとすると返って阻まれる、言わばカニの甲羅のような物である。

先も述べたように、ムハンマドが長生きしてしまったために、クルアーンは聖書よりもはるかに細かく、日常の箸の上げ下げまで規定することになってしまった。このようにこちこちに成立したイスラムであるから、普段は「寛容と慈悲の宗教」ではあっても、ひとたび先鋭化するともう隅々まで徹底的に先鋭化してしまう。本当ならイスラム教徒自らの手で、自ら犠牲を払って過激分子を始末するのがイスラム教の進歩と健全化ためだ。だが残念ながら直ちには期待できない。多国籍軍による封じ込めは、成功しても一時的で、かつ結局は異教徒による押しつけであるから、またいずれ同様な原理運動がおこるだろう。

ただイスラム国は、少なくとも表向きには歴史に逆行する神権政治であって現実的ではないから、いずれは自滅していくと思われる。世界がそれまで待てるか否かだ。キリスト教が十字軍を例外として、「先鋭化しなかった方が例外的だ」と言うことを、肝に銘じておくべきである。

16、久美子社長とカサノバ社長

今話題の女性社長2人、大塚家具の久美子社長と日本マクドナルドのカサノバ社長、ともに女性の時代の寵児であり、インテリで一流大学卒業後MBA(経営学修士)もしくはそれに匹敵する職歴を積んだ後に、現在の地位に就いた。しかもどちらの会社も

今色々な問題を抱えていて取り組むべき課題は多く、しくじれば会社の未来もなく自分の首も危ないと言うことで、言わば不名誉に有名になっている。

ところがこの表面上は良く似た東西の2人の女社長、その手腕や行動規範はむしろ真逆のようだ。久美子社長は経営方針を巡って実の親と争奪戦となり、結果プロキシファイトで6割超の株主の賛同を得ると言う圧倒的勝利で社長に返り咲き、「古参のベテランの首を切らない」と言う足かせの元で経営近代化を図っている。個人株主は久美子さんの美貌につられて支持したのかもしれないが、株式の多くを握る機関投資家は冷徹に提唱するビジネスモデルを評価したということだろう。

その久美子社長が、先日旗艦店の改装を兼ねた「お詫びセール」で、自ら陣頭に立って客一人ひとりに花束を渡していた。いわゆる「ふれあい」である。そしてその頃カサノバ社長は、2年連続売り上げ2割減と言う危機的状況にあって、株主総会で頭を下げはしたものの、ほとんど現場回りをせずに相変わらず財務諸表の数字を眺めていただけだったと言う。カサノバから見れば久美子社長の「触れ合い」は経営に無関係な単なる卑屈な大衆迎合、パフォーマンスに過ぎなくて、司令官たる社長の仕事ではないと見えただろう。だが、久美子社長は実のところ、単に花渡しをしただけでなく併せてその目で現場を良く見まわっている。

ここに久美子社長の日本式経営とカサノバの欧米式経営の差が見て取れる。ちなみにカサノバのやっていることはサボりでも何でも無い。単にMBAの授業で教授された数値重視主義を真面目に実践しているだけなのだ。おそらく模範的な学生だったことだろう。だが欧米は「全ては数値に表れる」と言う誤った数値信仰の呪縛にあるところ、久美子社長はさすがに日本人、改善の要諦は現場の数値にならない所にあることを良く知っていた。かつて「経営の神様」と呼ばれた松下幸之助氏を連想させる。

もちろん久美子社長にも課題がない訳でない。ネット注文を主流に置くにしても、ニトリやイケアと言った「セルフ格安」とどう勝負するのか、また古参の社員をどうするのかといった問題だ。答えから言えば古参のベテランはコンシェルジュにして、要望があれば相談に乗ることにする。そしてそう言う待遇に我慢できずに去っていく人は追わない。ネット注文については大塚家具の高級路線とはバッティングしない。現にBMWとかフォルクスワーゲンとか、国産車より高めだが、ブランド力とステータスで売り上げを伸ばしているではないか。実は私も昔1度だけ大塚家具に行ってみたことがあるが、営業社員が看守のようについて回り、まるで囚人になったような嫌な気分がして、以後2度と行ってない。他方車はVWに乗らせてもらっている。

さて、では舟が沈んでも依然として数字しか見ていないカサノバの方はどういう処方があるのか。マクドナルドは良く言われているように、昔の輝きが無くなった。20年くらい前は「安くておごれる」という宣伝も打っていたが、今や「高い、まずい、遅い」である。米国へのあこがれの消滅とともに左前になって行った。同じ牛肉を使った牛丼の倍の値段で、マックと同じ代金で本格ラーメンや中堅ファミレスに入れてしまうのだ。しかも日本は米国や韓国と違って、ハンバーガーだけ、キムチだけという社会ではない。ファミレスや惣菜屋やスーパーも充実し、完成品のみならず「中食」も充実し、様々なメニューと購買方法の選択肢がある。ここでコンビニが、ドーナツに続いてバーガーにも進出したら、マックに本当に未来はない。

「バーガーと言う業界が不要になりつつある」との意見も聞くが、つまり写真屋や時計屋のようなもはや過去の遺物だという意見だが、純日本的経営で知られるMOSバーガーは逆に値上げ攻勢の強気に出ている。だから業界全体の縮小ではなくマクドナルドの独り負けなのだ。そもそもアメリカの憧れが消滅した今に至っても「ハワイフェア」はないだろう。やるとしても「フランスフェア」「ネシアフェア」「アジアンフェア」ではないか。それに、今の体たらくの基礎を作って敵前逃亡した原田前社長に、「規定通りに」何億円もの退職金を支払う、この行為がこの会社の硬直性を象徴している。おそらくカサノバ自身が、「自分が辞める時にも満額もらって行くわよ」とするための布石であろうが。

マックはとにかく値段を下げて日本人好みにしないと未来はない。自動注文機を導入する、好きなバンスやサイドを自由に取れる流れ方式にする、そのバンスには牛肉だけでなく、ツミレとかチヂミとかポテトサラダとかお惣菜とか多種類置く。コーヒーはバリスタ方式にする代わりにラテだろうがカプチーノだろうが好きな物を汲めると言った具合だ。大鍋で煮る牛丼よりは安くないだろうが高くて500円、あるいは逆に思い切って「伊勢エビバーガー1000円」とかだ。最近のレシピサイトの動向にもヒントがある。「おにぎらず」を真似して「具包みバーガー」にすれば更に工業化できて安くなるだろう。おにぎらずの中身は今や「エスニックでもキムチでも何でもあり」に、たった2月で進化した。

こう言う荒技は、悪いが欧米育ちのカサノバではできない。大手惣菜チェーンとかから日本人生え抜きを引き抜いて社長にしないとダメだ。例えば今はまだ落ち目だが、小僧寿しとか京樽とかをもし持ち直すことが出来た社長が出たなら、そう言う人を引っ張ってくるのだ。そしてカサノバさんには体よく辞めてもらう、退職金はもちろん減額か自主返上だ。

いずれにしても久美子社長もカサノバ社長も大変だが、逆境は逆に手腕を振るえるチャンスでもある。カサノバさんに特に勉強して欲しいのだが、経営学は最近ますますサービス学になっており、企業が提供するのには直接的には物であっても実際は心の喜びだと言うことだ。MBAはいずれMSA(Master of Service Administration)に変わるだろう。その第1号モデルになるなんて、大きな名誉じゃないか。

17、小野田さんと三島さん

30年に亘る軍人生活を終えて帰国した小野田寛郎さんと、日本の美を追求した果てに自衛隊駐屯地に乱入して割腹自殺した三島由紀夫さん、どちらも日本精神の体現と言う面では似ているが、その実行の動機や実行方法に於いては違いがみられる。そこで彼らを通して日本的美意識を掘り下げるために、彼らに對談してもらった。

三島：小野田さん、このたびはお勤めご苦労様でした。

小野田：いやいや、まあ毎日が戦闘状態でしたから任務遂行には苦労は有りましたが、これは意義のある苦労でした。

三島：ほう、それは大和魂、つまり「ますらお」や日本の美を貫いたと言う意義ですか。

小野田：そう言う面もあるでしょうが、基本的には上官の命令です。

三島：そう言えば小野田さんは上官の武装解除命令で投降したのですね。あれはどうしても必要でしたか。

小野田：もちろん必要です。命令によって戦地に赴いたのですから、これを終了するのは終了命令以外にありません。

三島：私はそこにちょっと違和感を覚えるのですが、小野田さんは仮にその命令が間違っているに従ったのですか。形式的に過ぎるようにも思いますが。

小野田：天皇陛下のご命令に間違いはありません。上官の命令は天皇陛下の命令であります。それに軍隊と言うものは命令を軸とした統率組織です。命令を無視したら組織が崩壊する、これは決して美しくない。

三島：たしかに天皇は日本の美の象徴です。その意味では小野田さんは命令の先に日本の美を感じていたのですね。

小野田：国を思う心、これがなくては30年も戦闘状態を続けることはできません。

三島：小野田さんの任務遂行精神については、日本のみならず世界中が評価をしていますね。これをどう思いますか。

小野田：素朴に尊いもののために命をささげる、これに世界が感動してくれたとしたら、世の中もまだまだ捨てたものじゃないですね。

三島：ところで日本も終戦直後には宮城事件とかがあつて、暴走した青年将校たちがニセの命令書を作って終戦を阻止しようと決起したことがあるのですが、これについてどう思いますか。

小野田：そう言う激情に駆られた事件は戦前にも五一五事件とか二二六事件とかがありました。決起した青年将校たちの気持ちはよく分かりますが、それでも軍規を乱してはいけません。天皇陛下に刃向うことであり、日本の美を打ち壊すことでもありません。

三島：では忠臣蔵についてどう思うのか、お聞かせ下さい。今の論調だと「赤穂浪士も反逆者だ」と言うことになりませんか。私は忠臣蔵に日本の美が集約されていると思うのですが。

小野田：彼らも青年将校と同じです。時の為政者は処断に迷ったことでしょう。でもやはり政道が優先された。赤穂の者たちも潔い切腹で、つまり切腹命令に従うことで任務解除になりました。それで良いと思います。

三島：私は今の日本人のふがいなさに本当に落胆しています。実は近々同志の者達と隊を組んで国軍、つまり自衛隊に押し入り、幹部たちに檄を飛ばそうと思っているのですが、小野田さんはどう思いますか。

小野田：三島さんが激情に走りたい気持ちは分かりますが、隊と言うものは命令によって動くものであって檄で動くものではありません。多少は耳を傾ける幹部も居るかもしれませんが、それで動いてしまうような組織なら、それは皇軍とは言えません。

三島：もし動かないなら、私はその場で腹を切るつもりです。

小野田：ご覚悟は評価します。泰平に惰眠する日本人には良い刺激になるでしょう。

三島：ところで小野田さんは、今の日本を嘆いておられますが、どうしたら良いでしょうね。

小野田：たしかに任務を終えて日本に帰ってみて、あるいは物質的には豊かになったのかもしれませんが、精神的には支柱を失って荒廃しています。それ以上に「支柱を持つのが悪いことだ」と言った風潮すら見られる。これでは当分ダメでしょう。

三島：昔は有った「ますらお」の心、それが今の若者には見えない。

小野田：日本の美は教えられる物でなく感得するものです。ただ、感得するには経験が必要です。出来れば指導者も居た方が良いでしょう。私もルバング島のサバイバルで多くのことを学びました。私は「自然塾」を開こうと思います。

三島：ところで小野田さんは私の書き物を読んでくださいましたか。

小野田：何冊か目を通しましたし、評論も読んでいます。あなたの主張は基本的に間違っていない。日本の美を、少なくともその主要な側面を、極めて効率良く切り出しています。ただ少し、理念におぼれているようにも見えます。あなたは頭が切れすぎる。たとえ良いことであっても過ぎると弊害が出てきます。もっと現実を見るのはどうでしょうか。

三島：私も自衛隊の体験入隊とかしました。丁度小野田さんがこれから始めようとしている「自然塾」のようなものではないでしょうか。

小野田：あなたは自分の使命が良く分かっている。最早塾とか言わずに自分の美を完成したらどうでしょう。私は命令に生きましたがあなたは美の完成に生きる。心は同じでも、色々なやり方があった方が、むしろ良いのではないのでしょうか。

三島：分かりました。迷いが解けました。近々実行します。これが今生の別れであっても、後悔しません。ありがとうございました。

現実には三島は小野田さんが帰還する4年前に割腹自殺している。だから以上の「対話」は架空のものである。だがもし2人が会っていたらあるいは三島さんの行動も変わってきたかもしれない、そう言う思いを以て対話を構成した。架空を作るのはあるいは芸術では許されても科学では許されないのだが、その建前を外すことにより、グローバル＆ファンタジーの視点から、彼らのメンタリティをより深く切り出せると言う提案と試みである。

この記事の対話は私の創作だから稚拙に過ぎるかもしれないが、細かい内容よりも試みや方向の方を評価してもらえるとありがたい。

18、グローバル＆ファンタジー

人生の色々な試行錯誤を経由して小生が至った境地、それは一言で言うと「グローバル＆ファンタジー」(グファ:GFa)です。つまり第一に、世の中を専門の枠に捕らわれずに出来るだけ広くかつ多方面に(グローバル:広目天や多聞天のように)俯瞰する、そして第二に、その俯瞰結果から今までには気付かなかった新奇な世の中の妙味(ファンタジー)に気付き発信すると言う行為です。これは科学技術万能主義の現代にあって、科学の実証主義にお決まりの手順である「ローカル＆ファクト」(ロファ:LoFa)の対極にあります。

世の中を違う角度や広さから見ると、見え方が変わるとかあるいは見えない物が見えてきます。これ自体は従来も言われてきたことで、例えば人体にX線を当てると体内が透視できます。衛星画像のおかげで水文学はガラッと変わりました。「可視化」と言われる科学上の有力な手段です。ただ私はこの可視化を、科学と言う当たり前の事の実証のためにではなく、逆にファンタジーと言うウソギリギリの面白さのために使いたいわけです。そしてこの際敢えて、物事を出来るだけ大局から大ざっぱに見ようとすると、今まで見えてこなかった事物の妙味や意外な法則と関係、あるいはやはり意

外な穴や欠落（「なぜかない」ことに気づく）、さらにあるいは事物の意外な側面等が見えてきます。物事が超立体的に俯瞰出来て、知的興奮を覚えます。

この「見えていなかったものが見えてくる」状態のその対象は、「ありのままの概念なし」つまり「リアリティレベル」であることが多いです。ですが、科学技術の成果や芸術と言った「表現レベル」も対象になりえます。今までの記事の言い方からすれば、ストリートビューもウィキペディアも、いずれも新しい気付きの素材になりえます。そしてこの気付きは、きっかけのどのレベルかに依らず、ひたすら言葉にならない「心象レベル」で生起します。この点が重要です。他人に伝えるには「表現レベル」にしなければなりませんが、これはあくまでも必要悪であって、心の中では常に「心象レベル」を大切にしないと自滅します。すなわち表面しか見られずに気付きを忘れてしまうとか、あるいはイデオロギーに振り回されて色眼鏡でしか見られなくなります。

具体例を挙げましょう。何日か前に「三回の開国」と言う記事を書きました。日本の開国は3回あって、「1回目は聖徳太子、2回目は鎖国と言う逆開国、3回目は明治維新で、敗戦はこれらに及ばない」と言う趣旨です。この「結論」は科学でなく蓋然推論で、しかもそこには「事の大小」と言う相対要素が入っていますから、この結論には賛成の人も反対の人も居ることでしょう。それ自体は別に良いのです。私がこの「3回の開国」の記事で主張したかったのは、結論の方ではなくものの見方の方、日本史を例に「大きく概観する」と言うやり方です。このように大きく見ると、開国と言う類似な事象が3回あったことになります。人の能力とは「類似を同様とひとくくりにする」事であり、先の結論は「細部を除いて同じ事が3回繰り返した」と言うことですから、これはマクロレベルでの法則の気付きと言えます。しかもそのうちの2回目は鎖国であって、ここでは「逆は実は深い類似である」と言う逆転の発想を利用しています。しかもこのようにひとたび法則が見つかりとそれを基盤にして、①秀吉は収まりきらない、②敗戦は未満である、というより深い洞察に至れます。

私はこれらの知的な遊戯に大変興奮します。「面白い・面白くない」はこれまた個人の趣味が関係するので蓋然的な現象ですが、こう言う智的遊戯にファンタジーを感じる人は少なくないと思います。世の中にはそれこそゴマンと言う趣味があります。最近たまたま目に触れたのは「境界協会」と言う集まりで、「昔の区境や村境を巡り歩いてその名残（トマソン）を発見する」と言うことを趣味とする人々が会を結成する程に大勢居ると言うことですが、こう言うマニアックな趣味にもその根底に知的興奮、言わばグローバル＆ファンタジーの色彩を強く感じます。

こういった立体的理解こそが、電話帳とこの世の妙味を分けるものであり、ひいてはもののあわれに至る心構えです。もちろんこんな大風呂敷な気付きを「証明」できるはずがありません。原理的に科学のスケールを越えています。でも、「全ての事実は証明できるはずだ」と言う信仰の方が、むしろ無邪気過ぎないでしょうか。「全ての収束する無限数列はその収束値を解析的に記述できる」などと主張しているようなものです。世の中には体験によってしか感得できない事実の方が、圧倒的に多いのです。

先の開国の例では、「効率無視の江戸爛熟文化にあって貴族が増長しなかったのは不思議である」ことも見出しました。これは法則化に続く穴と言うか欠落、「有るべきものがないことの気付き」です。全体観で法則化できて初めて見えてきました。物事のリアリティはこれほどに立体的で、かつ妙味に満ちています。特に「無いことに気付く」、これは難しいことで知恵が試されます。そしてその分見出した時の喜びもまたひとしおです。ここまでの話だと、何か暇人が役に立たない学芸をやっているように見えるかもしれませんが、特許につながる発見や窮地を脱する秘策の想到も、究極的には同じ事です。ちなみに特許の場合も、成り立つことさえ説明できればその原理の解明は不要です。

最後に繰り返しますと、「以上のグファで一番重要なことは」と問われれば、それは「心象レベルに常に留まる事」です。直観やイメージ、それに第一印象を大切にしてください。言葉に騙されないように。言葉に落ちた途端に情報量が収縮して、グローバルでもファンタジーでもなくなります。芸術や小説、これらは心象を何とか伝えようともがいた結果の成果物ですが、心象それ自体はたとえ無限個の言葉を用いても表現しきれるものではありません。但し山にも川にも滝にもそれぞれ異なるが似たような「あわれ」の心象を生起する、あるいは人の不幸は人の数だけあると言いながらその不幸な人に同情する心は何かしら似ていると言う一見逆説的な統一論的事実もあります。そしてこの矛盾が心象の真の姿です。先日書いた「旅と酒」、この魅力も実際は心象です。「居酒屋は一軒ごとに違うから面白いが、それはどことなく『これが居酒屋だ』と言う共通認識があるからこそ面白い」、この構造も「開国の法則」と同じく法則でしょう。

このような人類共通の心象作用、共通と言う法則があるからこそ、それを元にそれからのずれを感じる個性の面白さが引き立つ、この「心象の法則」は、今後も折に触れて見て行きたいと思います。

19、小田原北条氏

小田原北条氏は、戦国時代に5代約100年間続いた戦国大名である。関西から流れてきた伊勢新九郎（北条早雲）を初代とし、代々領土を広げ、最大期には関東全域をその支配下に置き、甲斐の武田及び駿河の今川と覇を争った。特筆すべきは、名君の第3代北条氏康の息子の第4代北条氏政の時代である。彼には男の兄弟が10人近く居て、全員が文武両道に優れた勇猛果敢の者であったが、誰一人野心を抱かずに兄弟が仲良く相携えて広大な関東一円を分担して守備した。ちなみに小田原北条氏は、鎌倉時代を実質的に支配した鎌倉北条氏とは別で、血縁関係もない。

さて、北条氏の兄弟のこの一致団結は、日本の長い歴史にあっても他に類を見ないであろう。しかも、支配した各地の地侍たちを巧みに組み込んで統合的な武士団を形成し、その武士団の忠誠度も高く、統治システムとしての完成度も極めて高かった。今川氏と武田氏が織田信長に滅ぼされた後も大名として存続し、信長と互角に争っている。この類（たぐい）希な善政を敷いた北条氏だが、戦国時代末期の1590年に、豊臣秀吉の総攻撃を受けてあえなく落城した。北条一族も滅び、仲の良かった兄弟たちも捕虜になって秀吉配下の諸武将にお預けになり、その配流の各地で2度と会うことなく没している。

もちろん、善行に比例して恵まれる程この世は単純に出来ていないのは私も承知だが、それにしてもこのありえないほど美しく一致団結した北条軍団が、結局は武力の圧倒的な差であったとはいえ、なぜ滅びなければならなかったのだろうか。「天道は微なり」（天の正しい道理は地上ではほとんど実現していない）と言う中国のことわざもあるが、それにしてもこの仕打ちと最後は余りに非情過ぎないか。正しい行いが何の保証もしないならば、この事実を鑑みて我々は歴史からどのような教訓を汲んで、どのような行動規範に基づいて日々歩んだら良いのであろうか。

北条氏にもっと打算があったなら、中国の毛利氏や九州の島津氏のように、領地を3分の1に削られても、また秀吉の思いつきの朝鮮出兵に駆り出される屈辱を味わっても、家としては続いただろう。だがこの選択は、あるいは賢いかもしれないが潔くない。北条氏が秀吉の構える大阪から離れていたために天下の形勢を悟るに遅かったと言うことも考えられるが、もし理由がそれだけだったとしたら仙台の伊達氏はもっと悲惨な結末となったはずである。だが実際のところ伊達氏は、屈辱的に秀吉の元にはせ参じ土下座をして、領土は削られたが家としては存続している。

と言う訳で、この大いなる矛盾についてつらつら瞑想した結果、北条氏がほろびに至ったのは、むしろのその「美しい結末」が原因だったのではないかと言う結論に達した。つまり北条氏は内輪の結末が見事であったためにある意味内輪の論理で閉じること

が出来て、敢えて外に目を向けたりあるいは隣国と同盟や駆け引きをしたりする必要性がほとんどなかったのだ。

実際、もし秀吉のような大勢力が登場しなかったら北条氏はそれまでの勢いで更に領土を広げて、やがては東日本全部を掌握していたかもしれない。それほどに内のシナジー効果は強かった。歴史にもしもはないが、日本人の例にもれず判官贔屓（ほうがんびいき）の私は、「北条氏にもっとやらせてやりたかった」とすら思う。その美しい結末が逆にあだになるとは、思いつくだけでも皮肉すぎて自分の人格を疑いたくなるほどだが、でもそうなのだ。現に、親兄弟との骨肉の争いを常としていた伊達氏は、外の動静を見るに機敏で、屈辱を敢えて忍んで百姓上がりの秀吉に土下座しに行った。ちなみに伊達正宗は若気の至りとは言え、父親を見殺しにした上に実の弟を切り殺している。母親にも裏切られた。

では以上の考察を元に、我々は北条氏から何を学べば良いのだろうか。「好事魔多し」、これは1つあるが、この程度の平凡な気付きにわざわざ北条氏を引き合いに出す必要はない。「諸行無常」や「盛者必衰」、これも適用できるが一般的に過ぎる。特に北条氏にことさらなおごりや油断はなかった。結局彼らに学ぶべきは、「時の流れの非連続性」と言う非情さではないかと思う。「昨日まで良かった」からと言って、「明日もその調子で良い」などと言う保証は全く無いのだ。

こう言うと、「毎日が猜疑心で人が悪くなってしまう」とか「たった1日も枕を高くして寝られないのか」と言うことになってしまい、神経症になってしまいそうだ。だがそこは勘を研ぎ澄ませて、あたかも易占いのように、「移る時」のタイミングと方向を見定めよと言うことだ。私はつまらなく生きのびるよりも清い滅びを選んだ北条氏に一定の評価はする。だが、以前の記事で赤穂浪士に関して、「感涙はするが自分はやりたくない」と表明したように、こと自分に関しては、「おいそれと犬死しないように先手を打って行こう」と思うのだ。この態度はあるいは卑怯で矛盾であるが、世の中そのものが矛盾なのだから、結局自分も矛盾になるしかないのだ。

世の中、私のように財産や地位の何もない者にも、見る人から見れば落とし穴や既得権益はあるのだ。究極的には「生きていること」そのものが既得権益である。私は長生きしたいと言う希望はないが、だが愚かに無駄に死にたくもない。そのためには「良い子と言うだけでは足りない」、これを以て北条氏が私に呉れる教訓とする。

20、なぜ悟って生まれないのか

悟ることの大切さは、仏教とならずとも、また最近増加中の東洋かぶれの西欧人ならずとも、誰もが首肯するところである。もちろん、ヒンズー教では「神（ブラフマン）との合一」、道教では「天の理（ことわり）」、あるいは一神教のキリスト教でも「父なる神の御心」、イスラム教では「アッラーへの絶対服従」、ユダヤ教でも「ヤハウェーへの従順」等々、呼び名やニュアンスは宗教によって多少異なるものの、究極的にはほぼ同じ、言わば「超越した大客観」と言ったものを指していて、誰にとっても人生の究極の目標である。「多神教は detachment、一神教は attachment」と言う人もいるが、そう言う表面の違いを通り越して究極は一致していて、「道は違っても頂上は同じ」とは古今東西の多くの宗教者が認めるところである。

そしてその悟りや従順に至るために、多くの人がそれぞれの道で修業をする。我欲を捨て、より高い境地を目指し、色々な制限を守って、何年も一步一步道を登っていく。それは「終わりのない旅」にも例えられるものだ。それでも多くの者が途中であきらめない。その悟りの境地が、たとえ金にならなくても、得る甲斐のある貴重な物であることを知っているからだ。ではそれ程人に根源的な価値物であるのなら、どうして人は言わば本能の一部として、生まれながらに悟っていないのであろうか。神様は実は人が悪くて、わざと「もったい」をつけているのであろうか。

人は食べないと、あるいは息をしないと死んでしまう。だから人は生まれながらに教えられなくても、食い、息をし、排泄することができる。また、ちょっとした動作の繰り返りで、寝返ったり、這ったり、欲しいものを手に入れたりできるようになる。どうしても困れば泣いて周囲に警告を発する。「困る」が「泣く」に結び付く回路が、生まれながらにして備わっているのだ。だったらそれらほど単純でないにしろ、人が「悟りの芽」を持って生まれてくる方が、本能の本来の存在理由である「自己防衛」からして、有って当然の能力だと思う。

悟りの修業、この修業の大変さの程度は、人によってかなり違う。先日言及した兼好法師は器用な人だったようで、大して苦勞していないようだ。もっとも苦勞せずに得た物を、人はあまり大切にしないが。そうかと思えば天台宗大阿闍梨（あじゃり）の酒井雄哉師は、命がけの千日回行を2回も遂行している。こう言う人には脱帽するものの、「普通の人がもっと気楽に悟りに至れたら、この世はさぞかし平安で極楽だろうに」とも思う。

こう瞑想していてふと気が付きが来た。かつて悟りを得た高僧たちも、どうも「万巻の書を読んだ末に」ではないのだ。勉強ももちろん補助的に役立ってはいるが、直接のきっかけは「カラスのカーと言う鳴き声を聞いて」とか「鹿脅し（ししおどし）のカコーンと

言う音にハツとして」とか「カエルがポチャンと池に飛び込む音を聞いて」とか「師の喝によって忽然と」と言ったように、割と原始的な五感への作用による意識の断絶がきっかけになっている場合が多い。千日回行や山伏の峯駈けも、そうやって自分の理性を追い込むことにより、こごかしい理屈を捨てて素の自分に帰る行為と見なせる。四国のお遍路も然りである。

つまり人は、外部伝達や思想形成のための言わば必要悪として言葉や論理を学ぶが、それら言葉や論理よりも重要である悟りは、実は言葉や論理の先にあるのではなく、むしろその根っこ、言わば認識以前の赤子の心にあるのである。良寛僧都も悟りに至ってから、専ら子どもと遊んでいたと言う。この意味で悟りの能力、その芽は、実は忘れただけで生まれながらに身につけているのである。生きるための食べるという行為も、最初は親に与えられてだろう。一人前に食べることができるのは、論理と教育で「仕事をしてお金を稼ぐ」ことを学んでからだ。

ここに、「インテリほどしばしば悟りが遠い」と言う「矛盾」が生じる。だが振り返ってみよう。インテリほど芸術に長けているだろうか。東大卒の銀行員で音楽家だった小椋佳、東大卒で俳人の長谷川權、教育大卒で居酒屋評論家の太田和彦、いずれも超一流大学出だが、その彼らの作品は多分に理屈ばかりが先走っていてつまらない。仏教改革者の法然は、「人は皆仏である」更には「南無阿弥陀仏と念ずれば誰でも往生できる」と説いた。これは革命的である。それまでは仏の道は「法」と呼ぶように、理詰めの究極と捉えられていたからだ。この改革はあたかも、その辺に転がっている道路工事のおっさんを連れてきて、「今日からこの人が本学の教授です」と言うようなものだ。では法然は「学習は無意味だ」と宣言したのだろうか。

そうではなくて「最終的には素の心だよ」と看破したのだ。結果的に「仏教が愚かを許した」かような誤解は生まれたかもしれないが、そして「悟りのためと称する勉学の細かい所の全てが必須でない」ことも事実である。だがそれにしても、「此岸から彼岸に渡る最後のところは素の心だ」とは、古今東西を問わない普遍的な真実である。だから結局、人は生まれながらに悟ってはいないものの、その芽は生まれながらに持ち合わせている。振り返ってみれば悟りを得ることが人の本能に順でない筈がない。

さて、最後に法然の悟りを元に、なぜ我々は日々学習するのか、その内容は本当に必要か、あるいは学校で何を学ぶべきかを考える。人は生まれながらの本能を持つが、同時に社会的存在でもなければならぬから、そうあるための社会常識、正義とか常識とか読み書きそろばんとかの最低限を習う必要はある。加えて自ら生計を立

てるために何らかの手に職をつける必要がある。これらの事項はたとえ必要悪であったとしても首肯せざるを得ない。

ではリベラルアーツはどうか。一銭にもならないが考える力がつく、少なくともそういう触れ込みだ。「大学はカルチャースクールか職業訓練校か」と言う問いに対して、「大学は考える力を要請する所だ」、それはその通りなのだが、現状のカリキュラムは「考える力の養成に最適」に構成されているかと言えば疑問になる。大学入試に英語は必須だが、そして英語で世界は広がるが、考える力の涵養に最適かと聞かれると首をかしげる。アメリカ人なら子供でも普通にやっていることだ。この辺については別途考察したい。

21、クックパッドに見るサービス学

ここ最近「サービス科学」と言うことが言われている。客に「喜び」という無体物を提供するのが目的である、サービスを科学しようと言う訳である。東京大学総長から産業技術研究所理事長になった吉川弘之先生も、その在任中に「サービス工学」に力を入れていた。サービスの構造解明は、産業界への寄与が大きいと言う実益のみならず、人の心理にも立ち入ると言う意味で学問的革新性も大きい。

この分野が注目されて数年、論文はもとより教科書も出始めているが、学問としてのまとまりはまだまだである。これと言った統一理論も見つからないので、結局はMBA（経営学修士）と同じくケーススタディーであるのが現状だ。そしてケーススタディーの学問には良くあることだが、教科書は理論でもケースでもどちらでもない、中途半端になってしまっている。総じて、「人間科学（心理学）、情報科学（統計学）、経営学を中心とする学際分野だ」と言う落ち着いたが、この総括では実はほとんど何も語っていない。

ところで私は最近、料理にちょっと凝っている。凝る動機は、学問と異なりちょっとしたアイデアをいくらでも入れ込めるし、レシピに厳密である必要もないと言う、創造や発想の自由性にある。つまり人の気付きや勘やセンスの手軽な実験として利用している訳だ。そしてそのレシピ集の主力サイトである「クックパッド」を良く利用している。そこで、サービスを通じて心象を知る手始めとして、上辺だけの教科書は捨てて、クックパッドで生きたサービス、特にこのサイトが人気である理由を見ることにした。

レシピサイトなのでレシピの投稿と不特定多数による閲覧システムがある、これは基本だ。料理はさっき言ったように工夫が効くのが面白い所だから、レシピを参考に作っ

瞑想録（その6）

た人は一言を添えたレポート写真をそのレシピ掲載者に送れる。そしてそれに対してレシピ考案者から一言コメントが入ってアップになる。まあここまではどのレシピサイトでもあるだろう。さらに、レポート(つくれぽ)がたくさん集まったレシピ考案者は「優れたレシピ及び考案者」としてクローズアップされ、1000個集めると殿堂入りできる。この辺でそろそろ遊びの要素が加わって来た。提供する財貨がサービスなら、遊びの楽しさは言わば抱き合わせだろう。

料理は、私のような遊民が気の向くままに作っているうちは楽しいが、家族の三度を揃える主婦(主夫)にとっては多分に仕事だ。そこで楽しく苦勞せずにレシピが見つかるようにと、キーワード検索や、ジャンル別に分けた「今日のお勧めおかず」の紹介ページもある。これは考える手間をかなり軽減してくれる。しかも、住所を登録しておくと思える食材を売っている近所のスーパーの紹介までしてくれる。手取り足とりだ。もちろんスーパーからは然るべきマージンを取っているのであろうし、この辺にビジネスモデルが見え始めるが。

さて、この程度で驚いてはいけない。遊びの要素とビジネスモデルはむしろこれからだ。料理のコツを教える自由談話ページ、アンケートに答えて皆の好みを知るアンケートページもあって、アンケート問題の方も自由に投稿できる。なお、ここまでの機能は無料登録で使えるが、月に300円を払うと「特別会員」になれて、プロの料理人のレシピも見ることができる。これなんかベテランの主婦やおもてなしの多い人には便利だろう。月に300円とは決して高い会費ではないので、捨て金同様に気楽に払える。だがこの有料会員は全国に60万人居ると言われて、これだけで薄く広く、運営会社に月に2億円も、言わば固定収入として転がり込んでくる。これは経営側としては十分にありがたい確定収入だ。

更にかゆい所に手が届くサービスとして、献立丸ごと投稿機能(個々の料理でなく献立のアイデアを丸ごと考えずに入手できる)、健康食の紹介(カロリーとか塩分糖の数値入り)、メタボ簡易診断と対策推薦食の紹介、タイプ別の美容に良い食材の紹介までである。しかも単に紹介して見せるだけでなく、お取り寄せサービスやお届けサービスまでしてくれる。そして診断結果や優良食材の効果体験等は、ある意味占いのような楽しさがあるので、談話室の格好な話題になってフィードバックされている。

そして極め付きが料理教室の開催だ。有料とは言え要望に応じて随時開催してくれるのはもちろんのこと、料理教室の講師養成講座までである。暇な主婦に「あなたも料理教室の講師になって小遣いを稼ぎませんか」と言う訳だ。これだけでも十分に立派な、生きたサービスモデルなのだが、殿堂入りレシピは定期的に本にして出版し、それら

瞑想録（その6）

の本は主夫の目に付きやすいようにその辺のコンビニやスーパーのレジの横とかに置いてある。つまり、優れたレシピを考案すれば結構有名人になれるのだ。

このようにしてクックパッドは、料理と言う普遍で日常的なものに特化して、遊びの素人にも達人の主婦にも、教え教えられ、あるいは息抜きやくつろぎ、さらにはSNS的なハンドルネームでの交流の場を提供している。その充実ぶりは痒いところに手が届く程で、心にくいほどである。

ではさらに広げて、「食べログ」のようなレストラン紹介もやっているか、あるいは料理教室以外の教室も手広くやっているかと言うと、そう言うことはない。あくまでも「基本は料理レシピサイト」と言うイメージを固定させて、ぶれない運営とすることで、普通のおばさんにも「レシピならクックパッド」と言う、パブロフの犬的な刷り込みを狙っているようだ。

だから書き込みにレシピ以外の勝手な話や悪口があると人力で削除して、イメージの低下と発散を防いでいる努力の跡が見られる。ためしに検索でわざと「下痢」と入れてみたら、「下痢の人の病人食」がいくつもヒットしたが、「トイレ」「ウンチ」「しっこ」では1件もヒットしなかった。更に料理におよそ関係ないキーワードとして、「久美子社長」とか「カサノバ」とか検索してみたが、1件もヒットしなかった。あくまでも「料理はクックパッド」が暖簾(のれん)なのだ。

クックパッドはそもそもこの業界で老舗であったが、ネット業界は基本的に新大陸の戦国時代なので、ニンテンドーやセガのように、「今日はウハウハでも明日はドボン」と言うことは日常茶飯事の、怖い業界でもある。クックパッドは2年前に大手検索サイトのヤフーと業務提携を結んだ。そもそもレシピの数と質で、従来も検索の上位に来る傾向はあったが、この協定のおかげで常に検索の最上位に来るようになり、これが今のクックパッドの地位を不動のものにしている。

但し協定は業務に限っており、資本関係(株の持ち合い)はない。そしてこれだけのサイト運営とアイデア出しを、社員数200人弱でやっている。200人と言うと、コンビニとかスマホショップとか新聞販売店のようなフランチャイズの小間物小売店を15軒程持っている程度のフランチャイジーで、まあフランチャイジーに例えれば中堅から準大手程度の規模であって、例えばセブンイレブン本社の社員数6000人に比べても決して多くない。

ところでこの王者クックパッドにも危機はあった。5年前にネット百貨店最王手の楽天が、「楽天レシピ」という似たサービスを始めたのだ。しかもこちらではレシピを投稿するとか作ったレポートを送るたびにポイントが付くというインセンティブが付いていた。当時は「クックパッドはもう終わりか」と予測するアナリストもいた。だがクックパッドは今でも優位を保っている。その理由がどうも、楽天レシピの方はポイント欲しさにつまらないレシピを載せる人が多くて、結果的に地盤沈下している、つまり「楽しさが無い」と言うことらしい。サービスモデルの基本が楽しさにあると言う重要事項に沿えないで居るのだ。クックパッドが楽天に対抗して当時どういう対策を検討したかは詳らかではないが、少なくとも結果的には、目先のポイントよりも質の高さがつまりサービスの高さが勝っているという、サービス学の重要な法則を教えてくれている。

そんなクックパッドにも不安材料は無い訳ではない。今のところヤフーとは対等な業務提携だが、ヤフーとしては「隙あればクックパッドを乗っ取ろう」と思っていることだろう。現に、今は「楽天トラベル」になっている旅行代理業サイトも昔は「旅の窓口」と言うベンチャーだったところ、金で買ったたかれてしまった。ネットSNS業界の「食う・食われる」は日常茶飯事だ。

さて、こうしてクックパッドを例に生きたサービスの実態を見たが、このテーマの次の段階は、ここでのサービスの知恵が異業種にも応用可能か検討することによる、サービスのあるいは人の心象の統一理論化、構造化である。構造化しないと、ケーススタディーが単に単発のケースオンリーに終わってしまい、人類共通の知的資産にならない。

22、東大総長賞

東大は毎年、「幅広く頑張った」在校生数名に、「東大総長賞」という賞を授けて奨励している。京大と並んで天下に聞こえた東大でも課題はある。もちろんその第一は、日本一と言っても世界ランクでは数十位に留まっているので、なんとか世界順位を挙げてCOE(Center of Excellence)になるべしという課題である。そして第二には、東大生の一般的評価として、「礼儀正しく理解も早いが、爆発力がなくて個性もない、単なる小利口な坊やたち」と言う評価を何とかしたいと言う、考えようによってはぜいたくな悩みである。そしてこの総長賞は主として後者の目的のために創設されたようだ。

今年も受賞者4人とその「業績」が雑誌「アエラ」に乗っていて、私はそのまとめ記事でこの「ニュース」を知った。

<http://zasshi.news.yahoo.co.jp/article?a=20150420-00000011-sasahi-soci>

ちなみにこの賞はもう10年以上も続いているそうだが、その歴史まで遡る価値はないと思えたので、今年の4人から見られる「東大像」を探ってみた。

- ・青木さん: 宇宙飛行士の夢から、ふとしたことで1年休学して世界を回り、途上国の教育支援に志望変更、NPOに所属して援助プランを練る。
- ・藤本さん: 一浪して入学、ダブルダッチと言う極めてマイナーな競技に取りつかれ、優勝した。今は宇宙研究に復帰。
- ・秋山さん: 北大から院試で東大入学。苦手な英語を克服して国際会議で発表。体力作りにロードバイクも始め、MITへの進学が決まっている。
- ・辻堂さん: 女性。親の転勤に伴って中学時に渡米、英語や友人作りで挫折を味わうが克服する。小説家が目標だが二足のわらじを敢えて履く。

以上の4人を見て私は、「さすがは東大」と感心した。どの人も何らかの挫折を味わっていて、真っすぐな道を歩んでいない。たしかに東大生にしては珍しいことだ。そして、「挫折に依って何かが変わり、軌道修正して厚みが増した人間になり、今も引き続き頑張っている」。4人とも全員がこのパターンだ。つまりこれらの4人は、①一度は挫折すること、②その挫折をばねに新たな展開をすること、という条件を全員が満たしている。これはどういうことかと言うと、「東大生であるからには勉強が出来るのは当然で、その上で何か更なる付加価値、つまり型破りが求められている」のだが、「どういうやり方でどの程度型を破れば評価されるか」を良く心得ている。「型を破る型」がちゃっかり出来あがっちゃっているのだ。

第二の「感心」は、この4人の選び方、みつくろいだ。休学、浪人、他大学、女性と、「すんなりでないマイノリティ」の条件を4人で一通りカバーしている。これで外国人留学生でも居れば完璧だ。この世の中の動きを鋭敏にキャッチした上での選定の仕方、みつくろいである。選定したのはもちろん学生でなくて先生たちだが、その先生方の器用さや要領の良さを如実に表している。完璧すぎて文句の付け方がないほどだ。先生がこうチョイナチョイナでは、いくら大学当局が「型破りな学生を期待する」と口で言っても、そんな学生が集まる訳がない。良く会社の求人広告で「出る杭を求めろ」と言っても、入社して本当に出る杭をやると途端につまはじきにされるが、東大も本音と建前の使い分けでは、企業そののけに小技が卓越しているのだ。先生も生徒もこれだけ型にはまっでは、ブレークスルーや創造的破壊などおおよそ考えられず、COEなどありようが無い。

もちろん、「東大に何も進歩が無い」とは言っていない。最近東大は、間接部門に限ってはいるが、軍需産業との共同研究を是認する方向に転向した。まあ、安倍政権に

早くも尻尾を振ったと言う見方もできるが、それにしても学生運動華やかなころはもちろん、今でも左寄りのシンパでないと居づらくなる大学教員と言う業界にあって軍需研究を認める、これは相当の勇気とやる気を要しただろう。例えば私立の慶応義塾大学ですら、明治天皇の玄孫である竹田恒泰氏が、講師に採用した後も右翼の論客を辞めなかった時には、彼を推薦した先生が一所懸命言い訳をしていた。また、そもそも華族の大学であった学習院女子大に一時、社民党党首でイアンフ問題の火付け役である福島瑞穂が教鞭を取っていた位の業界であるから、軍需アレルギーを払いのけた英断は大いに評価する。

だが世の中一般を考えてみよう。人生にちょっとやる気のある人なら、「挫折してそれを肥やしに方向転換を図る」人など山ほど、それこそ掃いて捨てる程居て、むしろ日常茶飯事だ。そう言う類をことさらに表彰する程に、東大と言うところは居心地の良い温室なのだ。そのままぬるま湯のような大企業に入り、無駄のなく最低の努力で仕事の格好をつけて部長くらいにはしてもらい、目出度く定年退職する、これがほとんどの東大生の平均的人生である。そして本人たちもそんな人生を、大して嫌だと思っていない。人畜無害で使い勝手の良い使用人たちである。

世の中を面白くした型破りな人間を振り返ってみよう。久米宏、タモリ、野坂昭如（この人たちは全員早稲田大学だ）、あるいは勉強とは無縁だったかもしれないが、分け隔てなく弟子を養いラーメン界を革新した山岸一雄さん、あるいはソムリエの田崎信也さんとか音楽家の秋元康さんとか妖怪評論家の荒俣宏さんとか、こう言った人たちが実は東大が建前でほしいと言っている「型破りな学生」なのだろうが、東大出身者でこの手の人たちは聞いたことが無い。現に私が知っている東大の先生たちも、「大きすぎるテーマを選んでもいつまでも完成しないからほどほどに大きいテーマを」と、テーマ選びの段階から賢いことこの上ない。

だから今年受賞した4人にも言いたいのが、彼らが本当に突きぬけることがあるとしたら、おそらく永遠に不可能だろうが、東大と言うひそかなプライドを捨てた時だ。

23、忠臣蔵考（その2）

以前に（その1）で、忠臣蔵を例に大和心について考察した時に、「私は彼らの偉業には感涙するけれども、だからと言って自分ではやりたくない」と言う気持の矛盾の問題を提起した。ここでやりたくないと言うのは私個人の感想であって、「私はやりたい」と言う勇気ある人も居るかとは思いますが、やりたくないと考える人は現実には多いのでは

ないだろうか。そこで素朴に、どうして「尊敬するけどなりたくない」と言うことになるのであろうかを瞑想してみた。

分かりやすい例を挙げる。子供がTV等で野球の選手に感動すると、素直にあこがれて、「ぼくも野球選手になりたい」と思う。「尊敬する人のようになりたい」、これが普通の感情である。大人であっても悟った人を見て、「私も悟りを得たい」と思う。智恵が付いた大人であってもこれが自然で普通の思考回路である。ところがこと赤穂浪士に関する限り、「尊敬するけどなりたくない」のだ。しかも忠臣蔵の物語には「日本人を泣かせる要素が山と積まっているにも関わらず」なのだ。なぜであろうか。

もちろん打ち入るまでの浪士の日々は、我慢と努力と穏忍自重の日々であった。だが野球選手になる夢だって実現するには日々の地味な努力は不可欠で、しかも日々の努力を実践したところで本当に選手になれるのはごくわずかだ。だから、地味とか努力とか継続と言った要素が「赤穂の人たちになりたくない」理由だとは考えにくい。ではなりたくないのは赤穂浪士のどの部分であろうか。

この素朴な疑問について瞑想するために、忠臣蔵のあらすじを敢えて分解してみた。

①田舎の小藩の家臣が殿さまを盛り立てている、②その殿さまが嫌がらせを受け殿中で不始末をして即日切腹になる、③藩がとりつぶされ藩士らは浪士になる、④同志が集まって仕返しを画策する、⑤1年半の間身をやつして穏忍自重し機を伺う、⑥討ち入って見事に成功する、⑦幕命により切腹を賜る、以上である。このどこをやりたくないのか。

第一に、自ら選択した訳でもないのに勝手に主従関係が決まっている点、これはまあ当時としては普通で、特に疑問に思わなかっただろう。第二に討ち入りと切腹、これも構わない。切腹は名誉の刑だし痛いと言ってもほんの一瞬だ。幕府の裁定が下るまでのお預けの2カ月はちょっと宙ぶらりんで、気が落ち着かないとしても。逆にどうも気が進まないのは、第一に1年半に亘る穏忍自重だ。いつ終わるかとも分からない、身をやつしての地味な諜報活動、これは自分にはちょっとしんどくて我慢できないように思う。ただ、「お取りつぶしの次の日に即討ち入り」だったとしたら、この話もここまで人々の涙を誘わなかっただろうから、穏忍自重も大和心の重要な要素である。再び花が咲くには季節が巡って1年待たねばならない。

瞑想するに、自ら忠臣蔵をやるに当たって一番気が重いのは、理不尽なお取りつぶしによって浪士になった点ではないか。野球選手と比べて一番差があるのもこの点である。野球選手を目指すのに、「君だけグラウンドの草取りだけやってなさい」とは考

えにくい。さも双六で、ちょっとしたチョンボを理由に、いきなり「10コマ戻って2回休み」とかなった気分だ。ただこの理不尽、実はこれも大和心の重要な要素なのだ。と言うか大和心の本質は世の中が矛盾で出来ていること、諸行無常でありもののあわれであることを知ることなのだ。

日本の人々は世の本質が矛盾であることを知り、さらにその矛盾の美しさをも知りつつも、「自分だけはそういう目には遭いたくない」と思っている。だからこそ事あるごとに寺社に詣でて祈願をするのではないか。つまり世の中の矛盾に対応して、日本人の心もその本質は矛盾である。ここが今日のポイントだ。我々は安寿と厨子王や能の隅田川の話に涙するが、と言うか涙するしかできないが、だからと言って自分は決してそういう目に会いたくない。特攻隊員には感涙するが自分はやりたくない。赤穂浪士が野球選手ほど単純でないところも、そして野球選手より人々に感動を与えるのも、いずれもこの矛盾の一点にある。

その証拠に同じ野球の選手でも、難なく選手になった天才よりも極貧から苦勞してなった選手の方を、人々は感情移入してより応援するではないか。そしてその応援している人々に「あなたもああいう人生をしたいか」と聞くと、ほとんどの人が「いやだ、天才選手の方をやりたい」と答えるだろう。ここに人の気持ちの難しさがある。赤穂浪士に限らずあまねく世の中の現実のほとんど全てにおいて、人は「尊敬するけどやりたくない」のだ。それは卑怯でも臆病でも何でもない。単に理不尽が当たり前なだけだ。人は口先や理屈では動かない。

赤穂浪士も、浪人になるまではそれが普通とは言え脇が甘かったが、境遇にはまってしまった後の態度は一貫して慎重かつ立派だった。もし自分も同じ境遇にはまってしまったら、浪人が議論の前提として既にあると言うのなら、あとは赤穂浪士とほぼ同じ道を辿った、少なくとも辿ろうと努力しただろうと思う。そして赤穂浪士が称賛される大きな理由の一つは、以上の議論を総括すれば、一度散った花が、季節が一回りして長い冬も超えた所で、討ち入って宿願を果たして再び花が咲いた、その見事さにあるのではないだろうか。待てば海路の日和あり、季節がめぐるとまたやがて花が咲くのは、日本の四季自然の基本である。

大和心の基本は、努力とか成果と言った上辺の点数稼ぎでは全く無くて、心の持ちようなのであるが、だから曾我兄弟のように討ち入りに失敗して討ち死にしてもそれなりに一定の共感は得られるのであるが、やはり「終わり良ければすべて良い」で、穩忍自重の後の成功という要素も欠かせないだろう。結局、「感涙するけどなりたくない」ではなくて、「なりたくないけど感涙する」と言うことなのだ。

24、ケーススタディー

MBA（経営学修士）、これはやる気のあるビジネスマンにとっては、あこがれかつほぼ必須のキャリアパスだ。米国の有名大学、MITとかハーバードとかはいずれもこのコースを提供していて、ここに世界中から優秀な学生を集めている。そしてこれらのMBAコースが口をそろえて宣伝する謳い文句が、「うちはケーススタディーを重視している」だ。胸を張って、いかにも「他大学も他学部も我々を見習うように、最強かつ最終の教授法とはケーススタディーだ」と言いたげなほどである。

でも本当にそうだろうか。カタカナで言うと如何にも格好良く聞こえるが、ケーススタディーって要するに、「出たとこ勝負の場当たり練習しか勉強の仕方が無いですよ」と言っているのと同じだ。どうして場当たりになるかと言うと、それはこの学問分野が未熟で、あるいは本質的に学問手続きに乗らない分野であるために、統一理論がないためだ。だから、仮に「ケーススタディー」であることは仕方ないとしても、胸を張ってではなく、下を向いて恥ずかしく済まなそうに、「すみませんがうちの勉強は場当たりのみになってしまいます」とつぶやいて欲しい。もちろん既に統一理論が存在する数学や物理学では、このような「場当たり学習法」を見習う必要は全くない。

ではこのような場当たり学習をやって、一体どのような力がつくと言うのか。ちょっとケースが違えばもう応用不可能ではないのか。幸いなことに人はそこまで愚かではない。ある会社の倒産事例を学べば、それはもちろん全ての倒産事案に万能ではないものの、会社が似たような症状になった時の気付きぐらいには応用できるだろう。このような「似たケースへの応用力」が人の能力の本質である。一見異なる事物の間にどれだけの似た側面を見出すかで、その人の能力の高低が決まるのだ。だから今は狂騒曲になっている新卒就活も、この洞察力を直接に測る物差しがあれば、もっともともて効率的になるだろう。

いやそれ以前に入試だって、もし本気に純粹能力で取ろうとするならば、この直接の物差しで選抜するのが望ましい。今の入試科目である数学や英語は、日常に必要なだしそれなりの思考力も付けてはくれるが、気付きや洞察力の涵養と言う面からは必ずしも最適とは言えない。英語で受験生を選抜しているのは、これが出来ないと論文を読めないと言う教授技術上の必要性で選抜していると言うことであって、究極には職業訓練校に近い選抜法なのだ。

ただ、世の中全般を見てみると、統一理論がある分野はむしろ少ない。日常の常識もそのほとんどを、我々はケーススタディーで学んでいる。道の歩き方もバスの乗り方も買い物の仕方も、小さいころから簡単な例で学び始めて徐々に難しくするという方法で学んでいて、「座学で理論を学べば済む常識」など無いに等しい。でも、「厳密には同じ道など2つとない」のだからなぜかほぼ応用できて歩けてしまう。

常識の塊である冠婚葬祭、あるいは人付き合いの方法、更にあるいは人生の楽しみ方等、人生の常識は山ほどある。いずれも「個性が異なる人の心の襞を読む」と言う、ルールベースで記述すれば極めて複雑で例外だらけの事項も、もちろん学問ではないから学校では学ばないものの、日々周囲から実践でつまりケーススタディーで学んでいて、それで社会生活が送れているのだ。であるならばMBAだってケーススタディーはむしろ実戦的ではないかとも思えてくる。単に経営学を学べるだけでなく日常の常識も併せて身につくのだ。

でも逆に考えることもできる。ケーススタディーって昔の丁稚奉公やギルド制とどこがどれだけ違うのだろう。結局は大工の見習いが、ある時はカンナを、またある時はノミを、また更にある時はノコギリを練習して、結局その総体として10年もたてば家一軒を建てられる棟梁になるのと、どこが違うのだろう。これは本当に世界中のインテリが敢えて集ってまで学ぶほど、高尚な学問分野なのだろうか。

同じ理系でも物造りに係る工学部は理学部よりも、よりこのケーススタディーに近い。まあ工学部なんて大工みたいなものだからだ。ただ彼らは工学的な「ケーススタディー」を通して、個々のテクニックのみならず「工学的センス」とか「工学的なものの考え方」も身につけて行く。構造物のバランスのあり方とか、発散しないシステムのありようとかだ。これらは工学部でもほんの基礎課程で習う項目だが、社会に出ても職種によらず一番役に立つ常識でもある。法学におけるリーガルマインドも同様の位置づけだ。

そもそも大学(院)とは何を学ぶところだろうか。カルチャースクールや職業訓練校とどこが違うのだろうか。それは、個々の事物の背景にある「物の考え方」や「問題点の発見法」を学ぶところだと言うのが正解だろう。単に現場の修理や部品の取り換えだったら職業訓練校生の方がよっぽど使える。その故障の裏にある根本原因や共通原因を考える、少なくとも考えようとする能力と習慣の涵養が、大学で学ぶ価値である。この観点に立って問うが、ケーススタディーは考える力を涵養するであろうか。それはエリートにしかできない種類の事項であろうか。

もちろん統一理論や深遠な理論構成があればその方がはるかに望ましいのだが、現にそのような体系を持っている数学や物理学は、残念ながらそれが運命なのか、偏って世間からずれた「常識」しか教えてくれない。ここに世の中の難しさがある。つまり数学ほど理論的でかつ冠婚葬祭ほど現実的な分野あるいは業界があればそれが最高ののだが、そういう分野が現に無い以上は、結局ケーススタディーに頼るしかないのだ。その代わりに、そのケーススタディーに於いて如何に深く物を見るかを、教える方も教わる方も心がける。

「マクドナルドをどうしたら立て直せるか」とか「トヨタは分不相応に儲かり過ぎだがどうしたら良いか」とか言った臨場感のある問いに、ヒントが無い中から答えを何とかひねり出すのは、脳トレとしてはマシな方ではないか。思うにエリートにしかできないこと、それは「ヒントなしに新しいことを考える」ことだ。その「新しいこと」とは、新理論であっても良いし、新ビジネスモデルであっても良いし、また新奇な小説でも良い。こう言った既存の言葉で表せないならもっと良い。荒唐無稽であればある程良い。もちろんその創作アイデアがすぐに受け入れられるかは別の話だが、真のインテリなら自分が目に付けた新分野を信じられるだろう。

結局は学習であろうが実地であろうが、学んだそのものしか理解できない程度ならその人はエリートでもインテリでもない、高々理解がちょっと早い坊ちゃんだということだ。人間器用すぎても、何も生み出せない。

2015. 05. 16